ベトナム形成史における“南”からの視点

考古学・古代学からみた中部ベトナム（チャンパ）と北部南域（タインホア・ゲアン地方）の役割

西　村　昌　也

Historical formation of Vietnam viewed from the South

role of central Vietnam（Champa）and southern regions of northern Vietnam（Thanh Hóa and Nghệ An）

NISHIMURA Masanari

ベトナムの形成史を考える時に、主要民族、キン族が居住した北部平野部において、その南域（タインホア省からハティン省あたり）は、先史時代より非常に興味深い役割を果たしている。

つまり銅鼓に象徴されるドンソン文化の核領域を形成しつつ、中部のサーフィン文化集団による大量銅鼓の移出を実現する。そして、後漢代以降、中国文化を積極的に受け入れた集団と山岳部でドンソン文化伝統を保とうとする二極化がおきる。また、時には、中部のチャンパなどと連合しながら、しばしば中国政権側に起義・反抗を行う。そのなかには、中国側政権にもともと近しい存在で、権力基盤形成を行い、反抗・起義に到った例もある。

独立達成の10世紀から李陳朝期を通じて、ベトナムはチャンパと抗争を繰り広げると同時に、文化的にも経済的にも様々な交流関係を深め、チャンパとの交流はベトナムが独自文化形成を行う上で大きく寄与していたし、チャンパ側も陶磁器生産技術などをベトナム側から導入している。

15世紀以降、タインホア、ゲアンなどの北部南域の人たちは、積極的に中部入植や政権樹立を行い、現在のベトナムに到っている。その地政学的位置から、北部南域の人たちは、中国とチャンパを両端として、ベトナムの政権を真ん中に据えつつ、振り子のように重心を変えながら、巧みに勢力拡大に努めてきたと言える。

キーワード：中部ベトナム、チャンパ、タインホア、ゲアン、ベトナム形成史

図１　ベトナムの地理区分と本論で言及する主な行政区分

1．はじめに

現代ベトナムのキン（ベトナム）族を中心とする多民族国家は、この地で生起した諸々の歴史現象の集積結果である。北部から中部さらには南部を、国家領域として呑み込んだのは、15世紀以降に活発化したキン族の南進の結果であり、それ以前は北部ベトナムの平野部を主領域としていた。南には言語系統を異にするオーストロネシア語族のチャム系民族が形成していたチャンパ（林邑、環などのチャム系民族が立てた国家の総称としておく）が控えていた。そして、陳朝は14世紀以降、自らの支配領域の実質的拡大を図り、15世紀初頭の胡朝による南征、そして15世紀後半の黎聖宗の南征を頂点に、ベトナム側の優越が確立され、チャンパはその存在が急激に弱小化していく。

ところで、北属時代から黎朝初期まで、基本的に、南北間の熾烈な抗争に明け暮れた時代として語られることの多い、ベトナム－チャンパ関係史であるが、10-15世紀の歴史研究において桃木至朗氏[1] が明確に論じたように、抗争のみでは説明できない事象、つまり両者の親和的関係や両者間で頻発した内通や寝返り現象などにも注意する必要がある。

本論では、キン族揺籃の地、北部ベトナムとチャム族が国家形成（チャンパ）を行った中部ベトナムの関係史を、北部ベトナムの南域（Thanh Hóa（タインホア）・Nghệ An（ゲアン）・Hà Tĩnh（ハティン）省域）を重要な論点に据えつつ、考古学や古代学[2] 的研究を視点の中心にして、先史時代末期（紀元前３－２世紀）から15世紀までという長い時間的枠組みで論じてみたい。本稿を通じてベトナム民族が歴史・地理的に蓄積・形成してきた、その性格・指向といったものの理解の一助になれば幸いである。

尚、本論で扱う地理的枠組みの呼称は以下のように定義しておく。ベトナム北部は、最北部からハティン省までで、それを南北に二分し、Ninh Bình（ニンビン）省つまり紅河平野までを北域とし、タインホア省からハティン省までを南域とする。中部はQuảng Bình（クアンビン）省からBình Thuận（ビントゥアン）省までとし、それを三分し北域をクアンビン省からThưa Thiên-Huế（トゥアティエンフエ）省（つまり海雲（ハイヴァン）峠以北）を北域、Đà Nẵng（ダナン）市やQuảng Nam（クアンナム）省からPhú Yên（フーイエン）省、Gia Lai（ザーライ）省を中域、Khánh Hoà（カインホア）省、Đắc Lắc（ダックラック）省からLâm Đồng（ラムドン）省、ビントゥアン省までを南域とする。そして、Bình Phước（ビンフオック）省、Đồng Nai（ドンナイ）省、Ba Rịa-Vũng Tàu（バージア・ヴンタウ）省以南を南部とし、その中でもTây Ninh（タイニン）省、Hồ Chi Minh（ホーチミン）（旧サイゴン）市までを東域とし、それ以西のメコン河下流域を西域として扱う（図１）。

2．ドンソン文化とサーフィン文化の時代

2．1．ドンソン文化とサーフィン文化の空間

紀元前４～３世紀に始まったと考えられるドンソン文化は、紀元前３世紀から１世紀頃が、その最盛期と考えられる。Heger Ⅰ式銅鼓を頂点とし、バケツ形青銅器、靴形斧、羊角扁鐘、短剣、矛など、様々

1）桃木至朗 2011年『中世大越国家の成立と変容』大阪大学出版会.

2）筆者の古代学とは、考古学のみならず、歴史学、地理学、民族学などの成果も併せて、過去を検討する方法を指し、いわゆる“古代”の時代のみを研究するものではない。

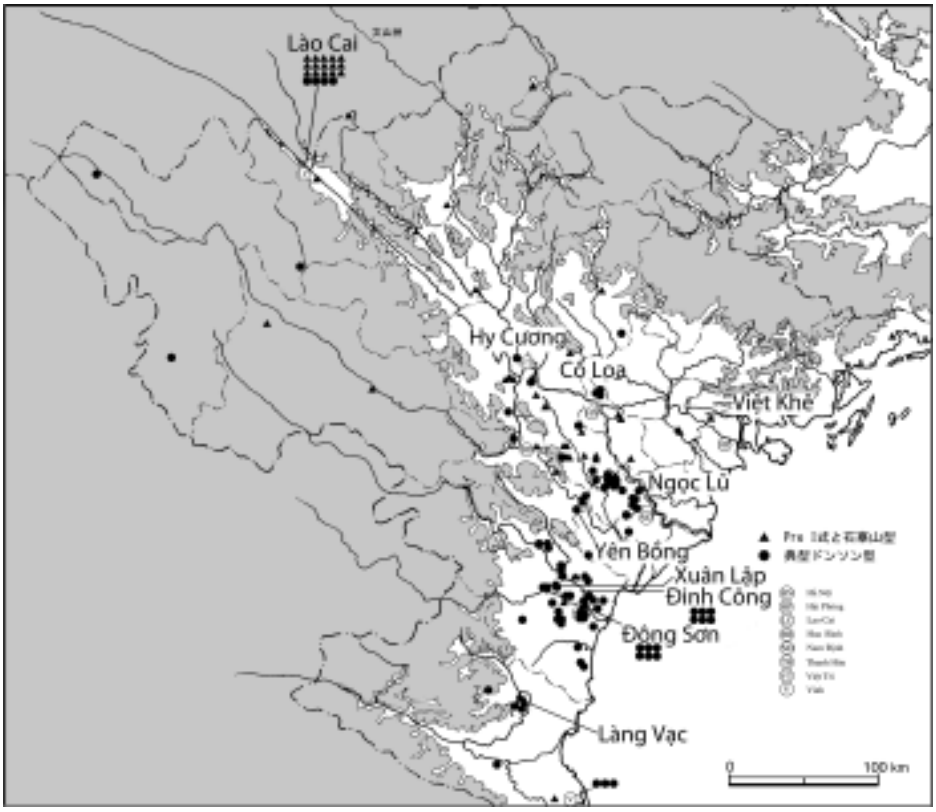


図２　ドンソン文化時代の銅鼓の分布

な特徴的な青銅器群を指標とするこの文化は、北部ベトナムの先史時代最終段階を彩っている。当文化の地理的領域に関しては、北部ベトナム全域を分布域として考える習慣が根付いてしまった感がある。また広義には、ドンソン文化はその特徴的な銅鼓が東南アジア大陸部のみならず、島嶼部にまで分布することを根拠に、一時期ドンソン文化は東南アジア全域に伝播したという考えも流布しているが、両説ともさしたる具体的検証を経ずに今日に至っている。

筆者は、こうした考えと距離をおき、ドンソン文化は銅鼓を頂点とするドンソン的青銅器の製作・利用文化が根付いている地域をその分布域に限定している[3)]。その初期における地理的範囲の確定こそ資料不足からやや困難であるものの、盛期には紅河中流域から紅河平野の南半分、そしてタインホア省からゲアン省北部という範囲となる（図２）[4)]。紀元前３世紀末か前２世紀初頭の造営と考えられるベトナム最初の大型都城Cổ Loa（コーロア）城は、ドンソン系銅鼓が出土するが、造営者側が銅鼓生産を行ったものとは考えず、その周辺域（つまり、紅河平野北域以北）はドンソン文化に対峙する勢力下と考えている[5)]。

3）西村昌也 2008年“北部ヴェトナム銅鼓をめぐる民族史的視点からの理解”『東南アジア研究』、46-１号：３-32頁，西村昌也 2010年“鋳造技術からみたヘーガーＩ式鼓に関する考察“『南海をめぐる考古学』、同成社：23-52頁．　西村昌也 2011年『ベトナムの考古・古代学』同成社，360頁.

4）西村 2008年 前掲論文、西村昌也・ファンミンフエン 2008年、“中部ヴェトナム・ビンディン省出土の銅鼓資料と文化的脈絡の検討”『東アジア文化交渉研究』１号：187-219頁、西村昌也 2011年，前掲書.

5）西村昌也 2008年“ハノイ北郊のコーロア城について”『古代学研究』、180号：457-469、西村 2011年，前掲書.

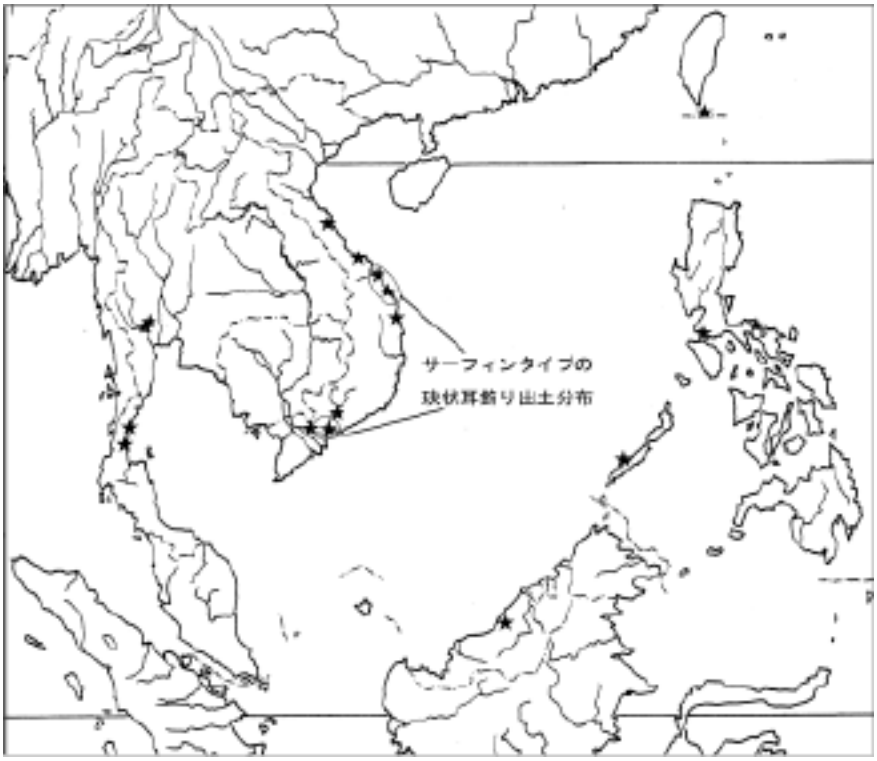


図３－１　サーフィン文化の玦状耳飾り分布

そして、ドンソン文化とほぼ同時期の中部ベトナム平野部を中心に、甕棺葬と、有角式や双獣頭式の玦状耳飾りを指標とし、各種の鉄器、紅玉髄や瑪瑙、そしてガラスビーズを伴うサーフィン文化が確認されている（図３－１）。当文化にも南北の地域差が存在し、中部の北域から南域の北端部（カインホア省）までは、寸胴筒型の甕棺が主となり、中部南域から南部東域では球形の甕棺が主となる違いが認識されている。また、甕棺葬に関しては、中部北域や中域で鉄器時代以前のものが確認されており、長い前史を持つ伝統的埋葬形態であると理解されている。これは土坑墓や舟形木棺墓を伝統とするドンソン文化やそれ以前の文化伝統と大きな違いを見せており、単純化するならオーストロアジア系語族のキンやムオン族の祖集団とオーストロネシア系語族のチャム族の祖集団の差と考えてよい。

２．２．南へ運ばれたドンソン文化の銅鼓、仲介者としてのサーフィン文化

周知のようにヘーガーⅠ式銅鼓は、東南アジアほぼ全域（フィリピン諸島では未確認：図３－２）で出土するたぐいまれなる儀器あるいは威信材である。それゆえ、ドンソン文化というものは東南アジア全体に広まった青銅器文化であると考えられていた。つまり、ドンソン文化の集団がベトナムあたりから東南アジア各地に移住した可能性も想定されていたのである。しかし、近年の銅鼓自体の分類編年[6]や鋳造技術[7]の研究から、北部ベトナム以外の東南アジア各地から出土するヘーガーⅠ式銅鼓は、失蠟法

6）今村啓爾 1992年“ヘーガーⅠ式銅鼓における２つの系統”『東京大学文学部考古学研究室紀要』第11号：109-124.
7）西村 2008年 前掲論文、西村 2010年 前掲論文.

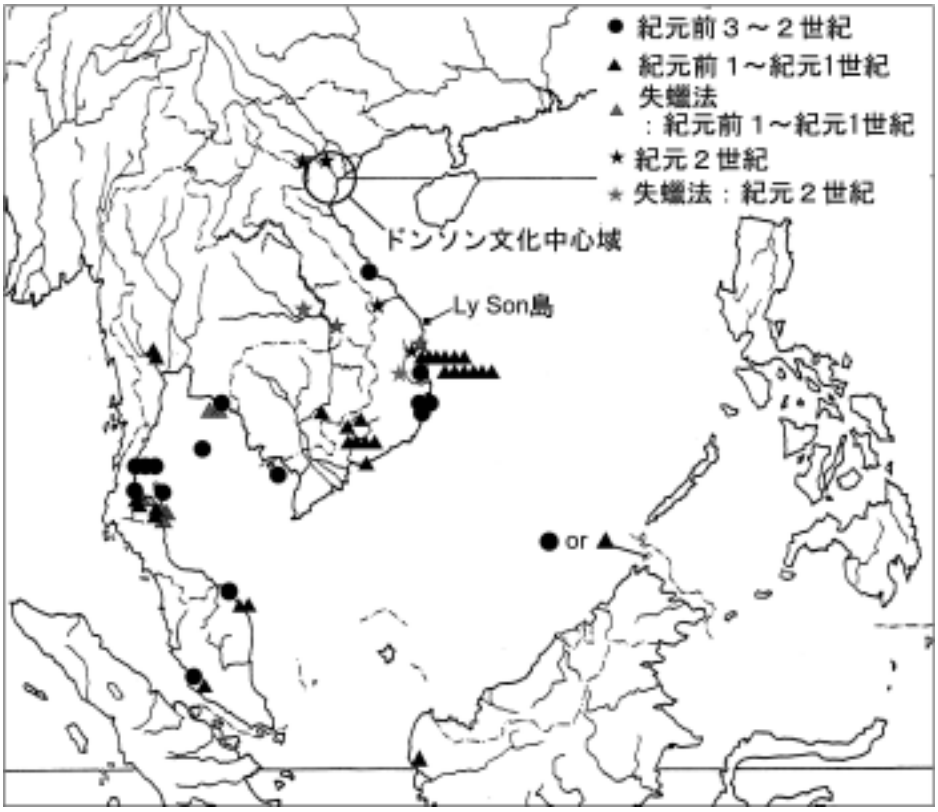


図３－２　東南アジアの銅鼓の分布（北部ベトナムは図２参照）

鋳造例を除いて、その殆どが、北部ベトナム製であるという仮説的理解に到達している。これはドンソン文化を構成する青銅器群のうち、銅鼓以外の青銅器が他地域で生産されている例が無いことからも裏付けられる[8)]。ただし、サーフィン文化の分布領域である中部ベトナムのなかでも、その北域と中域北半（クアンビン省から Quảng Ngãi（クアンガイ）省位）は、より南域とは異なり、ドンソン文化の青銅器が、サーフィン文化の墓葬[9)] に共伴している。特に、ゲアン省北部の大墓葬遺跡ランバック遺跡[10)] 出土品と類似するものが多いことが注目される。そして、クアンガイ省 Lý Sơn（リーソン）島の遺跡では、ヘーガーⅠ式銅鼓の把手破片（クアンガイ省博物館筆者確認資料）が出土している。 ただし、ドンソン文化と密接な交流を持つ中部北域や中域においても、ドンソン文化青銅器自体の２次的模倣生産は確認できず、サーフィン文化領域内の銅鼓を含めたドンソン文化青銅器群が、移入品である可能性が高い。この理解は、さらに北部ベトナムから距離が離れたタイ、カンボジア、東南アジア島嶼部においても当てはめて良いだろう。従ってヘーガーⅠ式銅鼓は、当時の社会の交易体系に沿って取引された商品的存在に近く、それを担って海洋を行き来し、取引を行った集団を同定する必要がある。ただし、この銅鼓を海洋に運んで取引した集団

8）西村 2010年 前掲論文.

9）Reinecke, A., Nguyễn Chiều and Lâm Thị Mỹ Dung 2002 *Gò Mả Vôi-Neue entdeckungen zur Sa-Huynh Kultur*.

10）Imamura K. and Chu Van Tan eds. 2004 *The Lang Vac sites vol 1: basic report on the Vietnam- Japan joint archaeological in Nghia Dan District, Nghe An Province, 1990–1991*. The University of Tokyo.

をドンソン文化の集団自身に求めることは、やや無理がある。それは、ドンソン文化には中国からの影響を受けた青銅器などは多いものの、ドンソン文化の核領域になるようなところでのサーフィン文化からの搬入品などは殆ど認められないからである[11)]。この問題については、すでにサーフィン文化集団が、ドンソン文化の銅鼓を仲介的に各東南アジア地域へ運んだという仮説[12)]が提出されており、上述のベトナム中部北半部の状況、サーフィン文化の玦状耳飾りが、台湾、フィリピン諸島、タイ、ボルネオ、マレー半島にまで分布している状況、マレー半島の北域Khao Sam Kaeo（カオサムケオ）で、玦状耳飾りと銅鼓の両方が出土している事実（共伴ではない）などは、その仮説を裏付けるものと考えられる。

より具体的には、サーフィン文化領域におけるドンソン文化系遺物の出土状況から、中部ベトナム北域・中域の海岸域の人たちが、北部南域からの銅鼓の直接入手や一次的交換／交易に携わったと推定する。もちろん、銅鼓の入手ルートは中部ベトナムの海岸ルートのみだけでなく、現ハティン省からのラオス・メコン河流域へ抜けるルートのように、陸上ルートでの運搬も検討されるべきであろう[13)]。

ただし、その後の２次的、３次的の銅鼓の交換／交易には、それらの地域以外の人々が広く関わり、結果的にインドネシア東部やパプアニューギニアまで運ばれたと考えるべきであろう。

３．北属時代前期

３．１．ドンソン文化末から北属期前期

本論では中国系の物質文化がかなり圧倒的となる紀元後１世紀半ば以降から938年の呉権による独立達成までを“初期歴史時代”として扱い、紀元１世紀半ば以降から３世紀初頭を初期歴史時代前期、３世紀半ばから７世紀初頭を初期歴史時代中期、残りを初期歴史時代後期と分期している[14)]。

初期歴史時代前期において、ドンソン文化に特徴的な物質文化は、徵姉妹の起義（紀元 40-43年）前後を境に平野部の文化から姿を消していくが、北部全体で考えた場合、完全な文化置換とはなっていない。例えば、漢系文化の器形にドンソン銅鼓の文様を抽出したドンソン系銅盂[15)]（紀元２世紀を中心とする年代：図４－１）など、若干のドンソン文化の系譜を残す器物もあり、なかには交趾郡西于縣で製作されたものもある。西于縣は筆者の研究では、ハノイ市の西域あたりに比定しており[16)]、漢系文化が圧倒しているはずの西于縣で、こうした器物が製作されていたことは、漢側支配者組織のなかに在地文化伝統を継承する人が含まれていたことを示している。この認識は以下の銅鼓の分布問題を考える際にも留意

11）わずかに、サーフィン文化などでも出土する紅玉髄などのビーズが出土する程度である。近年北部南端のハティン省で、Bãi Cọi の遺跡が調査され、サーフィン文化の耳飾りや甕棺墓などが出土しているが、それはサーフィン文化そのもの甕棺形式ではなく、在地の土器文化と融合の結果と思われる。

12）横倉雅幸 1993年“ドンソンとサーフィン”『東南アジア歴史と文化』22号：152-173頁.

13）新田栄治 1995年“ラオス，チャンパサック，サン島出土のヘーガー１式銅鼓とメコン水運”『鹿児島大学史学科報告』42：p.19-33.

14）西村昌也 2011年 前掲書.

15）吉開将人 1995年“ドンソン系銅盂の研究”『考古学雑誌』80-３：64-94.

16）西村 2011年 前掲書.

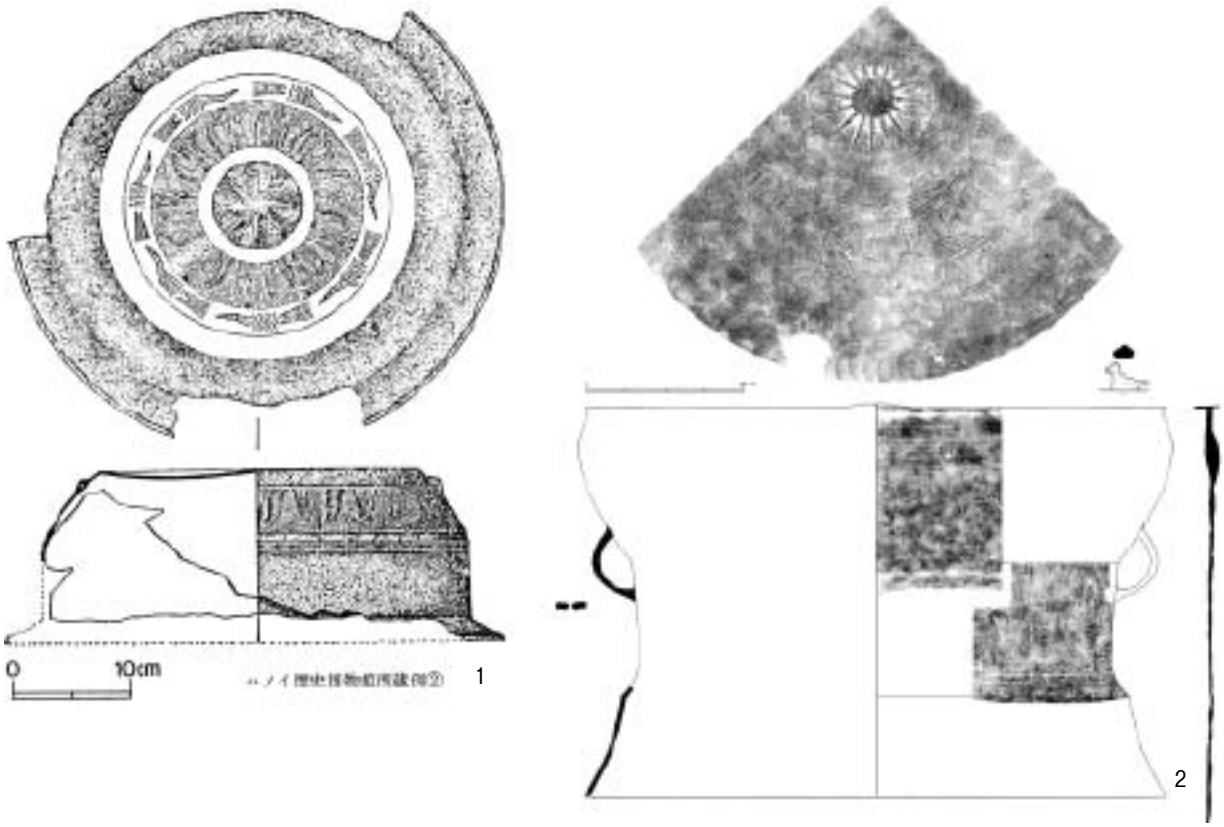


図４　１ドンソン系銅鼓文様を持つ洗
２タインホア省カムトゥイ県出土のカムトゥイ鼓

しなくてはならない重要な問題である。

ところで今村銅鼓編年の２b期（２世紀前半を中心とする時期）と３a期（２世紀後半を中心とする時期），吉開編年[17]のⅠ式中期に相当する時期において、銅鼓分布は紅河平野域内ではなく辺縁部が中心となる（図５）。

当該期の銅鼓において非常にユニークかつ注目すべき資料は、タインホア省マー川中流域のCâm Thủy（カムトゥイ）県で出土しているカムトゥイ（Cẩm Thủy）鼓（図４－２）とトゥイソン（Thúy Sơn）鼓は、鋳造技術上、幾つかの点においてそれまでのものとの大きな違いを見せている[18]。それは、鼓面外縁の無紋帯に湯口を設ける方法から、側面の合范線上部に設ける方法に変化すること、スタンプ技法による連続施文を行うこと、脚部接地部が内側で肥厚せず平坦であることなどに代表される。両例は紋様比較などから今村編年の２b期に並行するものと考え、実年代としては２世紀前半を想定している。その頃、北部ベトナムの平野部は、磚室墓出土遺物[19]に代表されるように漢系物質文化に圧倒されている感があるが、先述の

17）吉開将人 1998年“銅鼓再編の時代”『東洋文化』78号：199-218.

18）西村 2010年 前掲論文.

19）西村 2007年“北部ヴェトナム紅河平原域における紀元１世紀後半から２世紀の陶器に関する基礎資料とその認識”『東亜考古論壇』３号：57-101頁.

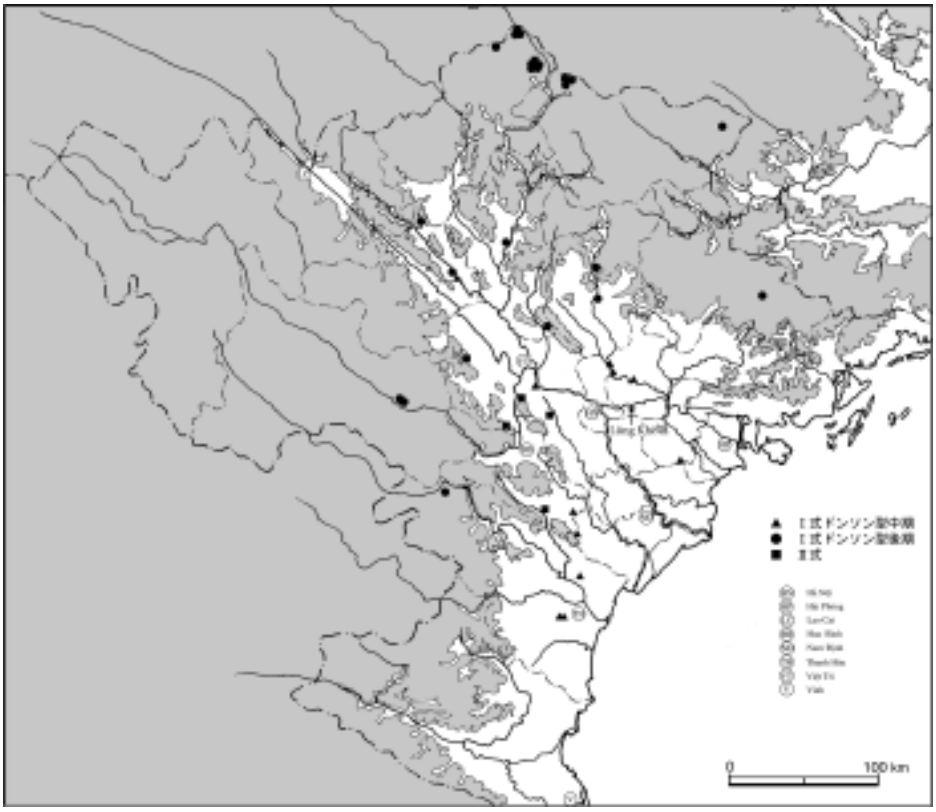


図５　北部ベトナムの紀元２世紀から10世紀頃までの銅鼓分布

ドンソン系銅盂のように、若干のドンソン文化の系譜を残すものもあり、銅鼓がどこで製作されたのかが問題となる。前出の２例の銅鼓に関しては、同じスタンプの利用から、同一工人あるいは同一工房での生産が想定され、両例が同じ県内で出土していることから、カムトゥイ県での生産可能性は大きい。当県は、タインホア省の中遊域をやや山側に入った地域であり、当時、直接漢の支配を被ってない可能性もある。この銅鼓出現期後の今村編年３期から、銅鼓は広西側で活発に製作されるようになるが、こうしたタインホア省の山間部での製作技術伝統が広西に移動した可能性もあろう。この移動は、平野部の漢人支配者側に対抗する山側の勢力の連帯などに結びつけて解釈されるべきと考えている。

３．２．龍編城の性格（中部チャーキウ城との類似性、仏教、銅鼓）

北属時代前中期における北部ベトナムの都城的中心は、Bắc Ninh（バックニン）省 Thuận Thành（トゥアンタイン）県にある Lũng Khê（ルンケー）城（図６）で、交趾郡郡治であった龍編城と比定されている[20]。

城郭は２世紀半ばに造営され６世紀頃まで機能したと考えている。城郭域で出土する物は陶器、磚、瓦がほとんどを占める。それらの生産地は前述の施釉陶器をのぞいて、ほぼ在地製品と考えられるが、器種、技術の起源は、嶺南地域あるいはさらに中国内地方向に求めうる。しかし、量的に多くはないが非中国的な遺物が出土発見されており、また、中国遠隔域との関係を考えなくてはならないものもある。

20）西村 2001年，前掲論文.

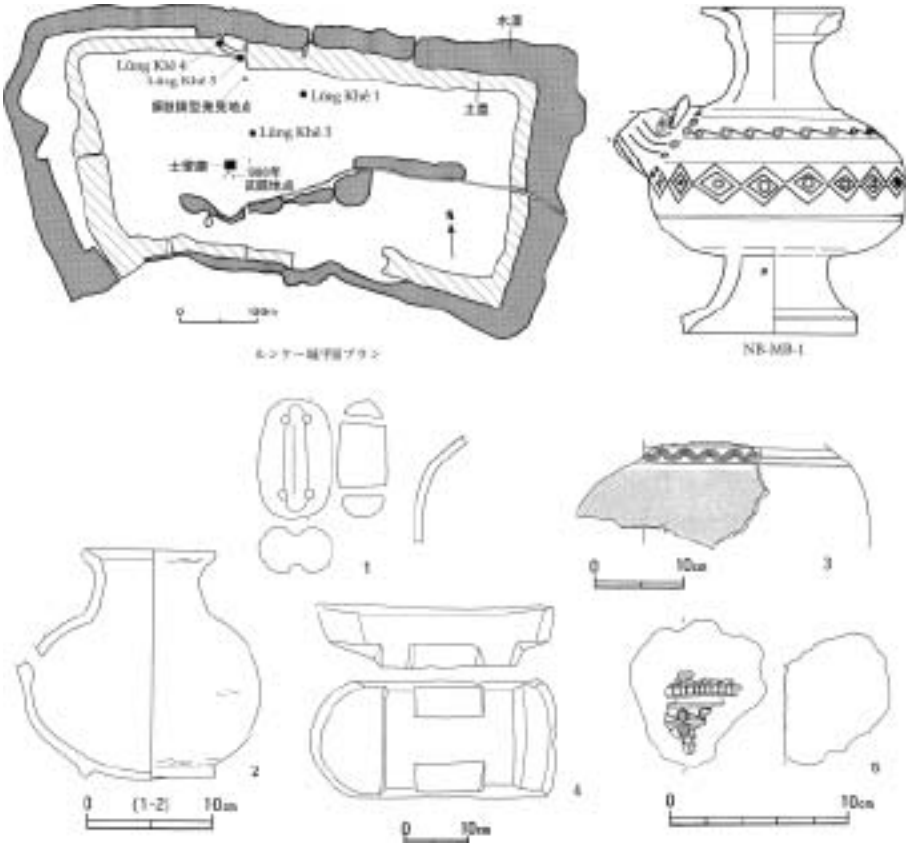


図６　ルンケー（龍編）城ならびに特徴的な遺物

それらは当城郭を拠点とした政権（集団）の性格を推察する上で非常に興味深い。以下に幾例かを挙げて、その背景を論じてみたい。

瓦当、平瓦、丸瓦などが最下層より上層まで出土している。丸瓦部は裏面に布目圧痕が残り、模骨法で作られていると考えられるものも存在する。図７はその代表例である。「万歳」（図７－１）や「位至三公」（図７－２）などの銘文をもつものは、典型的な漢ー三国時代の瓦当で、城郭中心部に相当する士燮廟周囲で行われた 1986年発掘地点での出土品である[21)]。これらの瓦は、城郭中心部居住者が漢人系支配者であることをよく表している。

また、LK５-L６-29例（図７－４）は珍しい類で、中国に多い、いわゆる雲文瓦当が変化してきたものであろう。素弁式で、凸線で大きく表した蓮弁と盛り上がりで表した葉６枚を交互に配している。LK１－L４－２D-32例（図７－５）も最下層で出土した蓮華文例である。LK４-L15D-33（図７－６）も城塁形成下層部での蓮華文瓦である。LK１-L４－１E-31（図７－７）は人面文瓦当で、同類は城壁形成層からも出ており、蓮華文瓦当と共存している。人面瓦当類似例（図８）は、タインホア省の Tam Thợ（タムト）窯や Côn Chân Tiên（コンチャンティエン）、クアンナム省の Trà Kiệu（チャキウ）城やチャンパの歴代宗教的中心遺跡である Mỹ Sơn（ミーソン）遺跡、ビン

21）Tống Trung Tín và Lê Định Phụng 1987 *Báo cáo nghiên cứu khu di tích Luy Lâu*（*Thuận Thành – Hà Bắc*）*năm 1986.* Tư liệu Viện khảo cổ học.

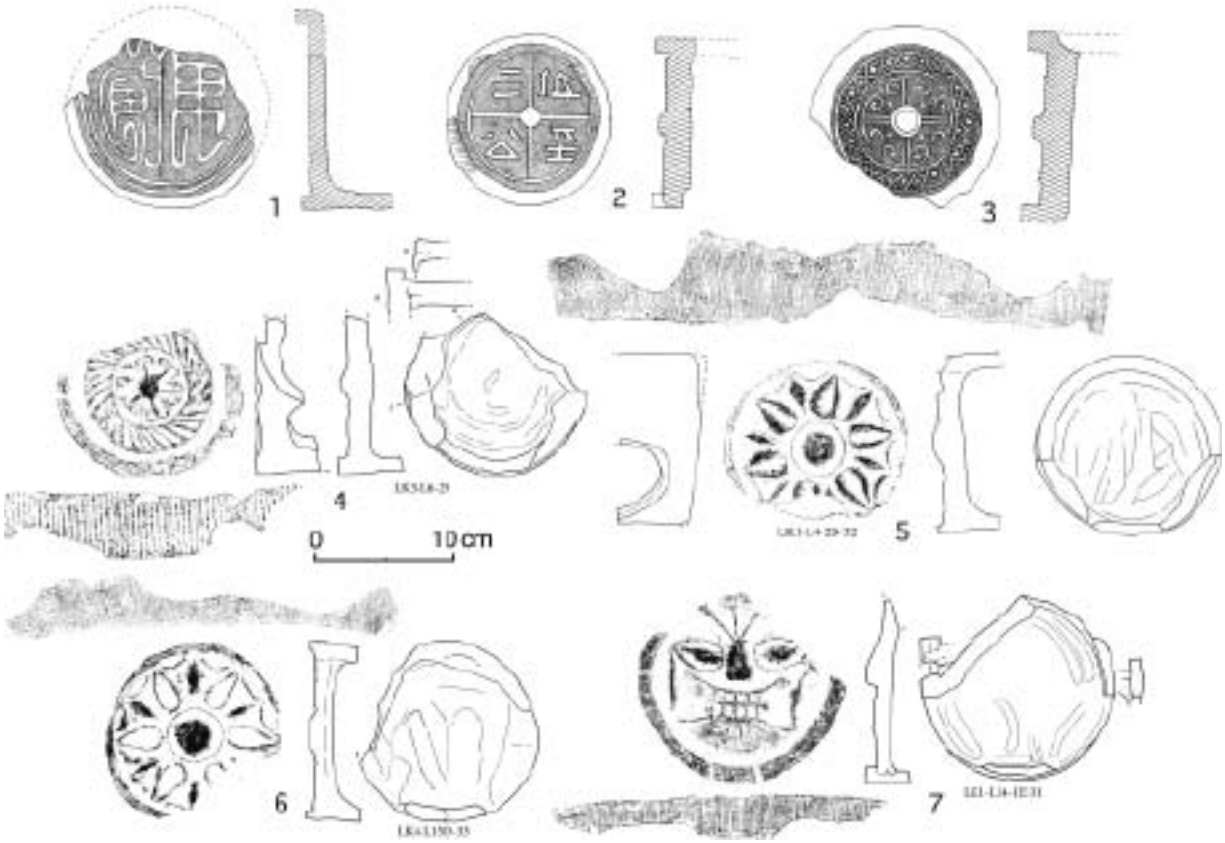


図７　ルンケー城出土の瓦当

ディン省のチャンパ都城An Thành（アンタイン）遺跡、南京の都城[22]などで出土している。南京（建業）の東呉期（229–280年）あるいは建業遷都以前の都、鄂州で出土しており、チャーキウ城のホアンチャウ地点を最下層・下層・上層に分期し、上層から出土する人面紋瓦当を、南京の建業都城からモチーフが伝播したものとして理解し、その年代観より３世紀に比定する考えが提出されている[23]。しかし、この中国からの伝播論は、まだ結論早急である。まず、ルンケー城例は最下層から１層直上のＬ４－１層から出土し、それは筆者の編年で２世紀第４期に位置づけられる[24]。人面瓦当の最古例は現段階ではルンケー城例であり、場合によっては北部ベトナムからチャーキウや建業への伝播も想定する必要がある。南京出土例には、ルンケー城例にモチーフが極似する例などなく、型式学的距離が存在する。また、チャーキウ城出土例とルンケー城例の間では、南京例とルンケー城例の間ほどではないが、一定の型式学的距離も存在する。さらに、南京などでは、共伴遺物など層位的根拠に基づく編年観は示されておらず、年代比定に甘さを残

22）賀雲翱 2004年『六朝瓦当与六朝都城』文物出版社.

23）山形真理子 2007年「ベトナム出土の漢・六朝系瓦」『中国シルクロードの変遷〈アジア地域文化学叢書７〉』雄山閣：240–271., Yamagata Mariko and Nguyen Kim Dung 2010 Ancient roof tiles found in central Vietnam. in B. Bellina, E. A. Bacus, T. O. Pryce & J. W. Christie eds. *50 years of archaeology in Southeast Asia: Esaays in honor of Ian Glover*: 195–205.

24）西村 2007年，前掲論文，西村 2011年，前掲書.

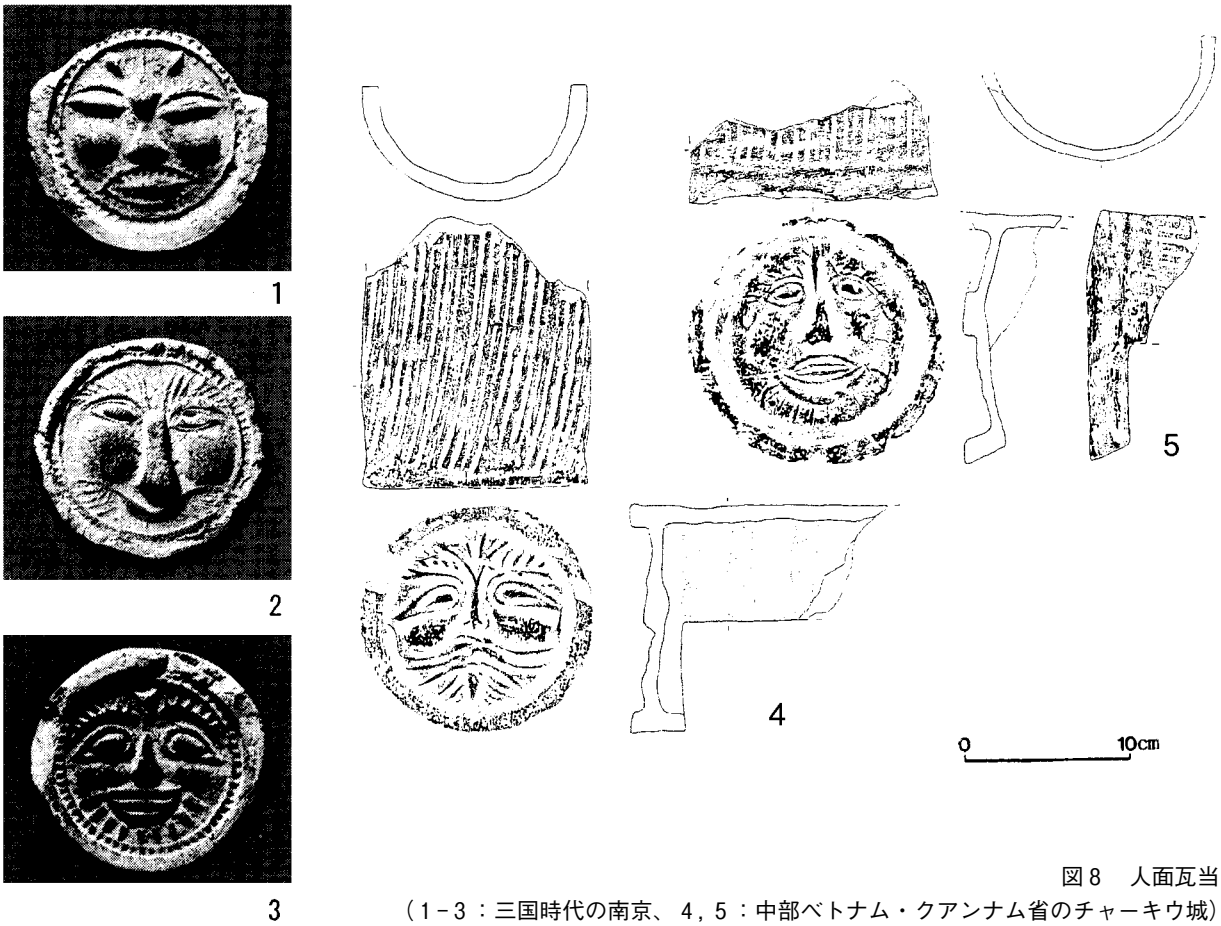


図８　人面瓦当
（１－３：三国時代の南京、４，５：中部ベトナム・クアンナム省のチャーキウ城）

している。

ところで、LK１地点において、紀元２－３世紀の瓦当は上述したような蓮華文や人面文瓦当が中心を占めている。さらに４世紀以降の瓦当は蓮華文がほとんどである。蓮華文瓦当については、正視型の蓮華文が中国秦代には出現しているが[25]、その後の発展をたどれる資料がない。ルンケー城では、共伴陶器から２世紀半ばまで遡ることが確実視され、現状では南中国、ベトナム中北部での最古段階の資料となりそうである[26]。筆者は、この蓮華文盛行の理由が、この地域での仏教盛行にあると考えている。既に士燮政権は、南海交易などの利により富み、士燮が往来する時には胡人が並び、香を焚いていたことなどを『三国志・士燮伝』は伝えている。また、ルンケー城の城郭外の南域に位置するザウ（Dâu）寺は、ベトナム仏教初伝の地でもあり、士燮の時にインド人僧が住みつき仏教が伝わったという伝説が『古珠録』(14世紀半ばまでに編纂)[27] に書き残されている[28]。

25）上原真人 1997年『瓦を読む』講談社.

26）西村 2007年，前掲論文.

27）Nguyễn Quang Hồng ed. 1996 *Di văn chùa Dâu.* NXBKHXH.

28）西村 2001年，前掲論文.

士燮政権後も、南北朝時代の交趾は仏教の中心地として栄えていたことが文献研究[29] からも裏付けられ、その首府（龍編）であるルンケー城で主を占める瓦当は、蓮華文であることに変わりはない。従って、蓮華紋瓦当と仏教の密接なつながりが交趾郡でも確認できることを強調したい。この仮説が正しいならば、3世紀のチャーキウ城は人面瓦当が主体で、蓮華文瓦当が見あたらない現象[30] を、仏教以外の宗教（ヒンドゥー教？）と結びつけるか[31]、あるいはヒンドゥー教と仏教の両方の要素をもつ宗教と結びつけて理解できるのではないかと考えている。この人面紋をインド起源のマカラ面とする意見[32] を吟味する必要があろう。この違いは蓮華紋と仏教の関係を前提とするなら、その時期チャーキウ城では、仏教がルンケー城周辺ほどには浸透しなかったのかもしれない。もちろん瓦当のみで、宗教の性質を断じようとは思わないが、そのような視点が当時の活発な国際交流状況の理解に必要と考える。

図6－1は、Kendi（クンディ）と呼ばれるインドに器形起源を持つ水注で、城域内操業のレンガ工場の土の採掘で発見されたものである。同様例はバックニン省内の磚室墓資料と考えられるコレクション（当時Hà Bắc省博物館所蔵資料：図6－2）にも存在し、こちらは底部に漢字銘文が、焼成前に刻まれており、在地での生産であることが伺える。

クンディは東南アジアのかなりの地域で出土しており、ベトナムではチャーキウやメコンデルタのオケオ文化の各遺跡で確認されている。型式的にはチャーキウで発見されている例[33] に近いが、この種の遺物は、オケオ文化のみならず、タイ、マレー半島など東南アジアの広範域に見つかる物で、形態的共通性も高い。クンディと関連して、北部ベトナムで留意しなければならない遺物に、象頭をかたどった注口付きの壺（図6－6）がある。水注部は明らかにクンディ類からの影響であろう。器種的に中国内地に起源を求められる物でない[34]。当例に限れば、接円線文が施されており、この文様は磚や後述の銅鼓に施される在地的な文様である。当例は中国、在地（北部ベトナム）、他の東南アジア大陸部の3つの要素を備えた、極めて珍しい遺物で、ルンケー城址からドゥオン川を挟んで北約10kmのところに位置していたNghi Vệ（ギーヴェ）のMB磚室墓での出土である。当墓の資料は紀元2世紀後半から3世紀初頭に納まると考えられる[35]。タインホア省海岸部のLạch Trường（ラックチュオン）[36] にも類例があり、その年代は紀元後2世紀に遡る。また、ベトナム南部のオケオ文化で頻出する注口土器（Kendi）を宗教儀礼と密接に関連したインド起源の土器と見なすなら、チャーキウ城は人面紋瓦当と注口土器を頻用するインド系の信仰・宗教が当時盛行していたと考えられ、それはルンケーとは違った仏教あるいは宗教であった可能性がある。政権と宗教の結びつきを考えるうえで重要な問題となろう。

図6－3は連続半円文をコンパス状工具で書いた土器の胴部破片である。胎土はクリーム色の軟質、か

29）Lê Mạnh Thát 1999 *Lịch sử phật giáo Việt Nam*. Tập 1. NXB Thuận Hóa,Huế.

30）山形 2007年，前掲論文.

31）西村 2007年，前掲論文.

32）Trần Quốc Vượng và Hoàng Văn Khoán 1986 Đầu ngói Trà Kiệu Quảng Nam Đà Nẵng. *NPH 1985:* 235-237.

33）Lê Xuân Diệm, Đào Linh Côn và Võ Sĩ Khải 1995 *Văn hóa Óc Eo :những khám phá mới*. NXBKHXH, Hà Nội.

34）三上次男編 1984年『世界陶磁全集 16 南海編』小学館.

35）西村 2007年，前掲論文.

36）Janse O.R.T. 1947 *Archaeological researchin Indo-China*. vol.1. Harvard University Press, Boston.

つきめの細かいもので、他の土器・陶器とは異質である。同様な施文方式は現在までのところオケオ文化の土器文様[37]にしか確認できない。LK３地点の最下層近くの出土であることから、紀元後２世紀頃まで遡るものと考えたい。

図６－４は脚台付き石皿で、城郭内操業のレンガ工場の土の採掘で発見されたものである。丸柱状の乳棒と共に、東南アジア大陸部から、マレー半島、インドネシアで発見されるインド起源の遺物で、北部ベトナム域では他に発見例はない。同型式の脚台付き石皿はベトナムでは、チャーキウ城やメコンデルタのオケオ遺跡[38]で出土、発見されている。型式的にはこれらベトナム中南部で発見されている物と全く異ならず、おそらくそうした地域からの搬入品であろう。インド系文化を持つ人間が直接に使ったと考えうる遺物である。後代になると脚が高くなるようで、当遺跡例はかなり早い時期の例と考えられる。紀元後４－５世紀頃と考えられるカントー省のNhơn Nghĩa（ニョンギア）遺跡[39]の出土例より古いと考えられることから、紀元後２－３世紀頃のものと考えたい。

図６－５は土製銅鼓鋳型片である。 1998年11月に城郭内のLK２地点付近でレンガ工場の土採掘抗の排土より発見されたものである[40]。また、第２例目が土塁構成層LK５から出土しており、これも第１例目と同じ接線二重円文を持つもので、同時期と考えられる。出土層は土塁の構築過程から２世紀半ば頃に限定できる。従って鋳型片も２世紀に落ち着く可能性が最も高い。この鋳型と同時期の銅鼓問題については、後述するが、漢側の支配政権中心部で在地文化が大切にする銅鼓を鋳造していることになり、政権側が、在地文化的脈絡での銅鼓の持つ意味を理解し、模造生産したと解釈できる。

ルンケー（龍編）城とその周辺域は、人面紋瓦、インド系脚台付き石皿、クンディ、オケオ文化起源の可能性がある土器など、ベトナム中部・南部などと直接系譜関係を論じる必要のある遺物が存在し、それらのかなりは２世紀から３世紀初頭に比定できそうである。また、その後の連続発展的系譜をもつ蓮華文瓦当の初現タイプやザウ寺の仏教初伝伝説などとも併せて、当地が２世紀には仏教（この場合、南伝仏教）の中心地であった可能性を強調しておきたい。さらに銅鼓の鋳造など、その目的は政治的意図（例えば在地文化継承者の抱き込みなど）をもったものとはいえ、在地文化の継承も確認できる。２世紀から３世紀初頭の交趾郡は、その地政的位置や当時の国際状況と中国内地の混乱した状況が結びつき、非常にユニークでクレオールな文化交流が行われた場所であったようだ。『三国志・士燮伝』にみられる当時の記述も、それに符合していよう。

当然、こうした文化・宗教的先進性が、後に三国時代以降“呉”の南進政策や対南方政策などを引きつけた可能性は十分あり、さらには中国内地での仏教の盛行などに結びついていった可能性がある。

３．３．紀元２世紀頃の銅鼓

ルンケー城出土の鋳型と同類と考えられる銅鼓は、今村編年３a期例であり，紅河平原域には全く出

37）Malleret 1960 *Archéologie du Delta du Mékong*. Tome II, EFEO, Paris.

38）Malleret 1960 前掲書.

39）Nishimura et al. 2008 前掲論文.

40）西村 2001年 前掲論文.

土例がなく、さらに周縁からの出土となる（図５のⅠ式ドンソン後期）。Thôn Mống（トンモン）鼓（ニンビン省）、Trung Hạ（チュンハ）鼓（タインホア省）、Đắc Glao（ダックラオ）鼓（中部高原のダックラック省）、An Trung（アンチュン）鼓（ビンディン省）[41]などが挙げられる。また，ラオス南部のチャンパサック域出土例やメコン本流域のタイ側のウボンラチャターニー県出土例、ビンディン省のゴーゾム鼓などは，当該期の銅鼓をモデルにして、地元で失蠟法により鋳造した例と判断される[42]。この分布は、北部ベトナムの南域から中部ベトナムを含むことになり、以前のドンソン文化の銅鼓が，紅河平野西域・南域からゲアン省の山間部から平野部にかけて密に分布しているのとは極めて対照的である。当該期に、龍編城での銅鼓生産があったとするなら、この銅鼓は龍編政権が、より南域の地域へ銅鼓を贈答品や交換品として使うことにより、異民族を慰撫しようとした結果と考えられるのではないだろうか。当時九真郡（現タインホア）から日南郡（ゲアンからクアンナム省北部[43]）の徼外において、相次ぐ起義・反乱が起きており、龍編城の政権が支配域安定のために、銅鼓が使われた可能性は大いにあろう[44]。

３．４．タインホアなどに残る地域的拠点の連続性、地域的割據

徵姉妹の起義（紀元40-43年）以後、タインホア・ゲアン各省域は、中国政権に対して、しばしば起義・反抗の場となっている。文末の表１は、徵姉妹の起義から呉権の独立（938年）までの所謂“北属時代”において、北部ベトナム域での起義や乱などの戦役とチャンパ（林邑・環）との関係史を、中国正史資料を中心にして列挙したものである。

これを俯瞰すると、１世紀から３世紀半ばまで、支配者に対する起義や反乱が、しばしば、交趾、九真、日南という北部ベトナムの平野域で連結して起きており、その動きは時として現広西壮族自治区側とも結びついている。

ところで、タインホア省の地元伝承では、157年の九真の起義は、居風縣人朱達によるものとされ、九真太守を戦死せしめ、160年まで日南郡も巻き込んで抵抗した人物とされている[45]。彼は、現在のTriệu Sơn（チウソン）県Thọ Phú（トフー）社Phú Hào（フーハオ）村出身とされる[46]。248年には趙嫗が起義を行うが、彼女の出身はYên Định（イェンディン）県Định Công（ディンコン）社とされる。この朱達と趙嫗の出身地は、タインホア省Mã（マー）川下流域平野部の中心近くに位置し、九真郡の中心胥浦（Thiệu Dương（ティウズオン）：後述）からも、さして離れていない距離である。当然、紀元２世紀において、こうした地域は漢系文化がすでに圧倒しているところで、在地系の文化が物質文化において主体をなすような場所ではない。可能性としては、朱達と趙嫗の両者とも漢帝国の支配者側にもとも

41）西村・ファン 2008年 前掲論文.

42）西村・ファン 2008年 前掲論文、西村 2010年「鋳造技術からみたヘーガーⅠ式鼓に関する考察」『南海をめぐる考古学』同成社：23-52.

43）日南郡の南端に関しては、近年の考古学調査の結果から後漢時代の陶器、瓦などが出土しているクアンナム省Duy Xuyên県を象県に比定するのがよいと筆者は考えている。もちろん、チャーキウ城は、その首邑ではない。

44）筆者は、同じような役割が、李陳朝期の第Ⅴ型式銅鼓（吉開分類の類Ⅱ式）にも当てはまると考えている（西村 2008年a 前出論文，2011年，前掲書）。

45）『後漢書』巻86・南蛮伝

46）Ban nghiên cứu và biên soạn lịch sử Thanh Hóa 1994 *Lịch sử Thanh Hóa* tập I.

とは近かった人物の可能性があろう。少なくとも、当時すでに形成され始めていたであろう山間部に居住するような集団、つまり、キン族とは文化的に全く異なる山間部居住民族に系譜的に連なるような集団ではあり得ない。

３．５．居住遺跡の継続性

ドンソン遺跡に関しては、筆者らが 2007年末より３年間の調査を行ってきた。当遺跡は、これまでの銅鼓の出土数（６個）やその面積から考えて、ドンソン文化時代の首邑と考えてよいクラスの遺跡であるが、遺跡範囲はドンソン文化時代の墓葬域が発見されたMã（マー）川右岸域に限らず、ドンダウ文化に並行する時期においては、西側の内陸斜面地へも居住域が拡がっていることが、明らかになった。そして、ドンソン文化期になると、居住域が川岸部に集中するように再編され、内陸部での居住痕跡が希薄化する（2007-2010年の筆者発掘調査より）。

また、ドンソン文化期以後もドンソン遺跡での居住活動は継続し、それは少なくとも９-10世紀まで続いていることが確認された。２世紀頃には、再び内陸部への居住拡大があり、５－６世紀頃には、内陸部に小規模な“仏寺”らしきものの建設も行われている。また、遺跡から北東に約２kmの同じくMã川右岸には、先述のティウズオンという大集落があり、ここは初期歴史時代前期のタインホア地域の首邑胥浦縣（九真郡治）の中心（現Triệu Sơn県Thiệu Dương社のLàng Ràng（ラン ザン））であったと見なされている。この集落の南域外れでは、ドンソン時代から初期歴史時代前期にかけての大墓域が確認されている[47]。

つまり、ドンソン時代から初期歴史時代前期にかけて、当地域は間断なく居住が続いていた可能性が高い。さすれば、ドンソン遺跡が先史時代の一大拠点的集落であるという性格と、ティウズオンの墓域規模を鑑みるなら、ドンソンやティウズオン遺跡域が先史時代から一貫してタインホアの中心首邑的存在であった可能性があり、初期歴史時代前期の大規模な漢文化の移植においても、その政治経済的中心が地理的位置を変えなかった可能性が高い。

これは紀元前２－３世紀のコーロア城造営、紀元２世紀の龍編（Lũng Khê）城造営に見られるような、在地文化の居住層を基盤としない拠点造営とは全く異なっていると言ってよい。つまり、北方からの文化移植あるいは導入にあたって、タインホアの場合はよりスムーズに受容・移行が進行したことになる。もちろん紀元１－２世紀の中国正史史料などが語る九真郡は、中国支配者側への抵抗と受け取れる起義・反乱が続発する世界であるが、在地勢力の中には積極的に中国側の文化・制度を受け入れる人々が確実に地域中心にいたようだ。

実は、タインホア域には安陽王や雄王などのような初期の伝説的王権にまつわる伝承が殆ど残されておらず、紅河平原域との対照的違いを示している。こうした違いも上記のような文化受容に関する地域差に関係している可能性が高い。

47）Lê Trung 1966 Những ngôi mộ táng thời thuộc Hán ở Thiệu Dương. in Nguyễn Văn Nghĩa ed. *Một số báo cáo về khảo cổ học Việt Nam*. Đội khảo cổ, Bộ văn hóa: 277-328.

4．北属時代中・後期

4．1．抗争の傾向

先述の表１からの傾向を眺めることから始める。４世紀から５世紀にかけては、交趾郡や九真郡での起義・反乱が前時期に比べ少なくなるが、逆に林邑と中国間での日南などの中国支配地南端をめぐる争いが激しくなる。これは、南海中継貿易の利を争うためのものであると一般には説明されているが、こうした外部つまり“南”との抗争により、内部での抗争が減少したことは注目すべきである。チャンパ（林邑）との抗争を通じて、北部平地部を中心とする民族的紐帯が醸成された可能性もあろう。

また全時期を通じてみると、南詔が勢力を増して交州に侵攻する９世紀中・後期を除いて、交趾郡域以外の起義・反乱は圧倒的にタインホア省やゲアン省域が中心であることが理解できる。

4．2．『晉帰義叟王』印と大隋九真郡寶安道場之碑文

タインホア省 Tat Ngô で発見された金印（図９）は出土脈絡不明ながらも、『晉帰義叟王』印[48] は、中国南北朝代の複雑な国際関係を象徴しているようで面白い。魏晉（西晉）代の官印制度の研究[49] によれば、「帰義」印は、「親魏晉」印を授与される国王クラスより下で、その配下に位置づけられる王侯に授与されるものとされ、胡・羌・氐・鮮卑などの異民族の王侯に授与されている。この理解を当てはめるなら、現タインホアに王侯的な存在を、晉朝が公式に印の授与を通じて認めていたことになり、さらにはその上の支配者的存在（とすれば交趾郡に存在か？）を認めていた可能性まで生じる。ただし、当時の北部ベトナムにおいては、呉と晉が併存した期間（265-280年）において、交趾をめぐって両者の抗争が起きており、呉の交州刺史・陶璜が、呉滅亡時までに九真郡官吏の李祚の抵抗を帰順させたりしている。当然、タインホア側の動きに晉との結びつきがあったとしても不思議ではない。金印の現物研究による年代比定などを行う必要がある。

図９　タインホア出土『晉帰義叟王』印
（Daudin 1936より）

隋代に九真の刺史を務めたとされる黎玉（谷）が、618年刻の『大隋九真郡寶安道場之碑文』[50] に登場する黎侯とされている[51]。この碑文はタインホア省の Đông Sơn（ドンソン）県 Đông Minh 社 Trường Xuân 村にある黎

48）Daudin P. 1936 Notes sur un cachet en or découvet en Annam. *Bulletin Societé Etudés Indochinois*.11-２: 95-105., 饒宗頤 『囿庵文録』.

49）秋山進午 2010年 魏晋周辺民族官印制度の復元と『魏志倭人伝』印, 史林 93-４：69-94頁.

50）漢文碑文としては、ベトナム現存最古の石碑文である。潘文閣、蘇爾夢編 1998年『越南漢喃銘文匯編　第一集北属時期至李朝』.

51）Đào Duy Anh 1963 Các bia cổ ở Trường Xuân với vấn đề nhà tiền Lý. *Nghiên cưu lịch sử* 50: 22-28.

玉を祀る廟敷地内で発見されており、北属期時代に実在した人物に対して廟が建てられ、その信仰が現在まで続いていること物的に示す貴重な例である。碑文内容によれば、黎侯は、愛（現タインホア省）、徳（旧日南郡：現ゲアン省位）、明（現ハティン省南部位）、利（現ハティン省北部位）、驩（徳州の改名後の名称）の各州の軍事を都督したことになっており、彼の子も日南郡太守を務めたことになっている。つまり、親子でタインホア以南の地域に勢力をもつ土豪的存在であったことが理解される。もちろん、このような父子や一族でベトナムに勢力を張った例は、先述の士燮以降、多くの例が存在するが、当例はそれが、タインホア以南域で実現された具体例として貴重である。

４．３．中国文化と仏教文化の浸透と扶南との繋がり

この時期の遺跡調査例が少ないため、どうしても遺物研究から推察を加えなくてはならないのだが、近年若干の資料が明らかになってきた。例えば、ナムディン省ナムディン市Bến Củi（ベンクイ）で、発見された石製阿弥陀如来像（図10-１）は、様式的に５-６世紀のものと考えられており、Trà Vinh（チャーヴィン）省のTrapan Ven寺院やSơn Tho（ソン トー）寺院にあった阿弥陀如来像（図10-２）と蓮華文の台座などと併せて様式的に酷似することが指摘されている[52]。また類似した阿弥陀如来像はホーチミン市美術館所蔵チャヴィン出土例（図10-３）やアンザン省Thoại Sơn（トアイソン）県Vọng Thê（ヴォンテー）社オッケオ（Õc Eo：日本ではオケオと呼ばれる）遺跡出土例（アンザン省博所蔵）なども挙げられる。つまり、ナムディン市の出土石像には、いわゆるメコン河下流域の“オッケオ”文化（一般には古代国家”扶南”）からの影響がみてとれる。

逆に、メコン川下流域のĐồng Tháp（ドンタップ）省Gò Tháp（ゴータップ）遺跡（Tháp Mười（タップムオイ）県Tân Kiều（タンキュウ）社）のGò Minh Sư（ゴーミンスー）地点、Cần Thơ（カントー）省ニョンタイン遺跡（Châu Thành A（チャウタインアー）県Thạnh Xuân（タインスアン）社）などでは、北部ベトナムで生産されたと考えられる印紋陶壺（図 11-１）[53]や無釉鉄彩陶壺片（図11-２）[54]が、少量ながらも確認されている。両遺跡資料とも４-５世紀のものと考えられる。そして近似する例として、先述のルンケー城LK１地点の上層部出土例などを挙げることができる。どちらも陶工がつけたマークがあり、非常に特徴的である。また、無釉鉄彩陶壺はこの時期の北部ベトナムに稀に確認されるものである。

ゲアン省のLâm（ラム）川左岸のNhạn（ニャン）塔遺跡（Nam Đàn（ナムダン）県Hồng Long（ホンロン）社）は、隋唐時代初期の磚塔（図12）が出土している[55]。そのプランや使用磚などから長安の大雁塔などとの比較もされている本遺跡は、装飾磚において、蓮座の上で瞑想する仏陀像を三体印文したもの、象や獅子のような動物などをあしらったものがあり、それらにインド・グプタ朝期美術の影響が指摘されている（図12）[56]。また、ベンクイ地点

52）Lê Thị Liên 2003 Buddhism in Vietnam during the 1st millennium A.D. from archaeological evidence. *Transactions of the International Conference of Eastern Studies* No.48:

53）西村 2011年 前掲書.

54）Nishimura et al. 2008 Excavation of Nhơn Thành at the Hậu Giang River reach, southern Vietnam,『国立台湾大学美術史研究集刊』第25期：１-68.

55）Trần Anh Dũng and Nguyễn Mạnh Cường 1987 Tháp Nhận ở Nghệ Tĩnh qua hai lần khai quật. *Khảo cổ học* số 3: 69-83.

56）Lê Thị Liên 2003 Buddhism in Vietnam during the 1st millennium A. D. from archaeological evidence. *Transactions of the International Conference of Eastern Studies* No.48：

1　　2　　3

図10　1：ナムディン省ベンクイ出土　2：チャーヴィン省 Trapan Ven 寺院　3：チャーヴィン省出土

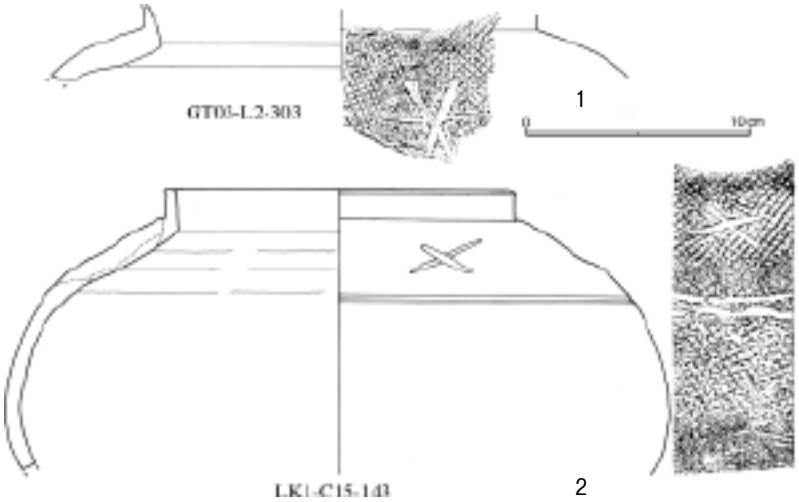


図11　南部カントー省ニョンタイン遺跡（1）とルンケー城上層出土（2）の印文壺

と共に、遺跡の立地は川岸であり、水上交通の便の良いところを選定していることも特徴的である。ニャン塔遺跡の場合、上流に少し遡れば、唐代の驩州城と比定されるヴァンアン（Vân An）城があり、さらには722年に唐朝に対して起義を起こし、安南都護府を一時的に占領した梅叔鸞（マイ・トゥック・ロアン）（通称梅黒帝（マイ・ハック・デー））の生地がこの Nam Đàn 県とされ、その主廟はヴァンアン城と同じく Vân Diên（ヴァンジエン）社にある。彼は、林邑や真臘国と通じて、安南都護府を陥落させたと記録されている[57]。これは、驩州がカンボジア側とも中部ベトナム側とも容易に通じやすい地政学的特性を示していていよう。

こうした考古・歴史資料は、当時の中国政権側の支配者、それに対抗する在地の土豪が、ある意味で

57）『旧唐書』巻184.

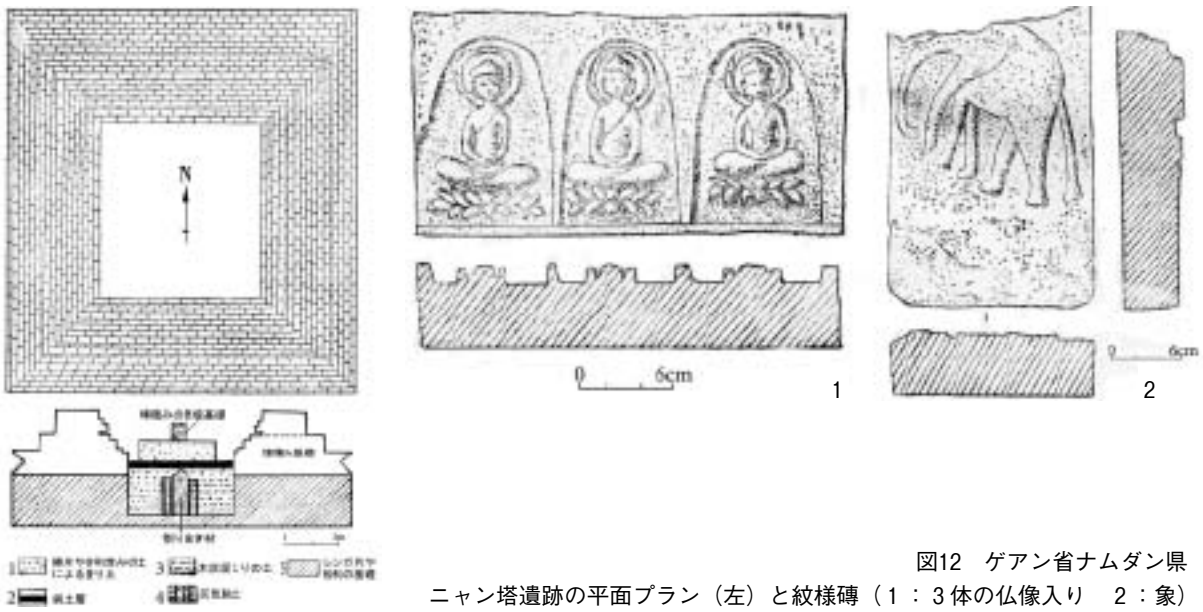


図12　ゲアン省ナムダン県
ニャン塔遺跡の平面プラン（左）と紋様磚（１：３体の仏像入り　２：象）

もともとは近い関係にあり、彼らの世界には当時国際的に流行していた仏教も入り込んでいた可能性も伺わせる。これはルンケー（龍編）城とザウ寺との関係でも確認できることである。そして前述のように、その仏教に扶南との関係が認められるなら、それは単に仏教自身の問題にとどまらず、当時の政治・経済関係にも、そのような国際関係を加味して考えざるを得ない気がする。南接するチャンパとは、中部北域で熾烈な抗争を行っている時代である。遠交近攻ということも念頭に置き、驩州とチャンパや真臘との関係、交州と扶南の関係といったように、仏教関係資料の背景にも個々の地域的繋がりや政治状況を鑑みる必要があろう。単純に北部ベトナムとして括りつけるのは危険である。

５．10世紀

５．１．平野部を長期間支配できない政権達

９世紀半ばには、南詔の侵入を撃破した静海軍節度使・高駢が、王を自称したと『大越史記全書』に語られるように、唐朝の体制弛緩・崩壊に伴いベトナム北部は独立化への指向を強める。それは10世紀に入ると明瞭化し、906年には現ハイズオン省西部（現Ninh Giang県xã Kiến Quốc出身）に中心勢力をもった曲承祐（クック・トゥア・ズー）が節度使を自称し、930年には南漢の侵入を撃退した楊廷芸（ズオン・ディン・ゲ）が、独立政権を打ち立てている。そして、938年に呉権（ゴー・クエン）が、再び南漢を打ち破って、古螺（コーロア）城にて即位している（図13）。

さらに、紅河平野での十二使君の乱立後、966年あるいは968年に即位した丁部領（ディン・ボ・リン）による丁朝と、980年の以降の黎恒（レー・ホアン）による前黎朝は、いずれも華閭（ホアルー）（ニンビン省）を都として政権を確立している。これが、唐朝の実効支配が崩壊後から李朝成立直前までの簡単な政治史の流れであるが、いずれの政権、王朝共に十分な地方支配が行われないままに短命で終わっている。基本的に、王権確立者のカリスマ性に依拠したもので、そのカリスマ性の威光が届く空間範囲も限られていたようだ。

楊廷芸は、先述のタインホア省ドンソン県ティウズオン社に祠廟が存在し、同地が出身地と考えられ

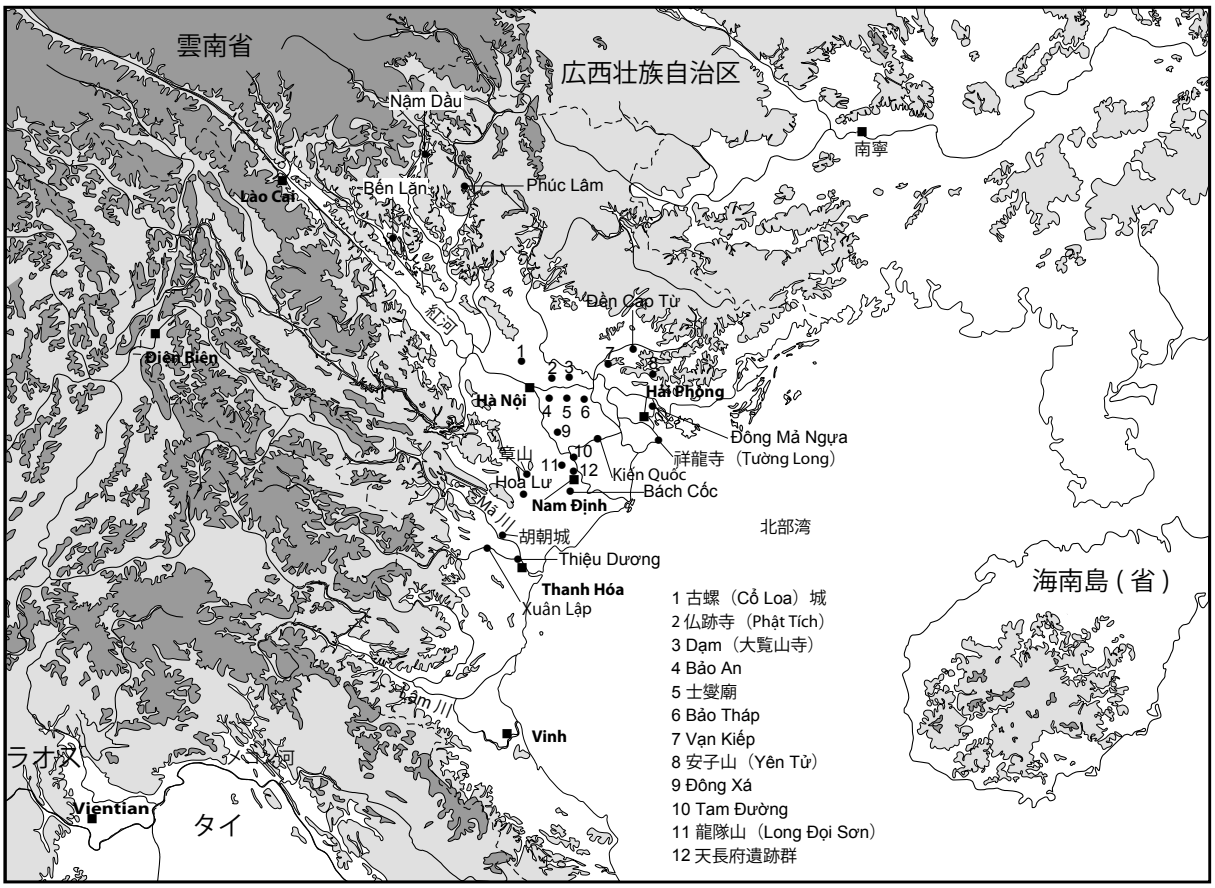


図13　10-14世紀の北部ベトナムの主な遺跡

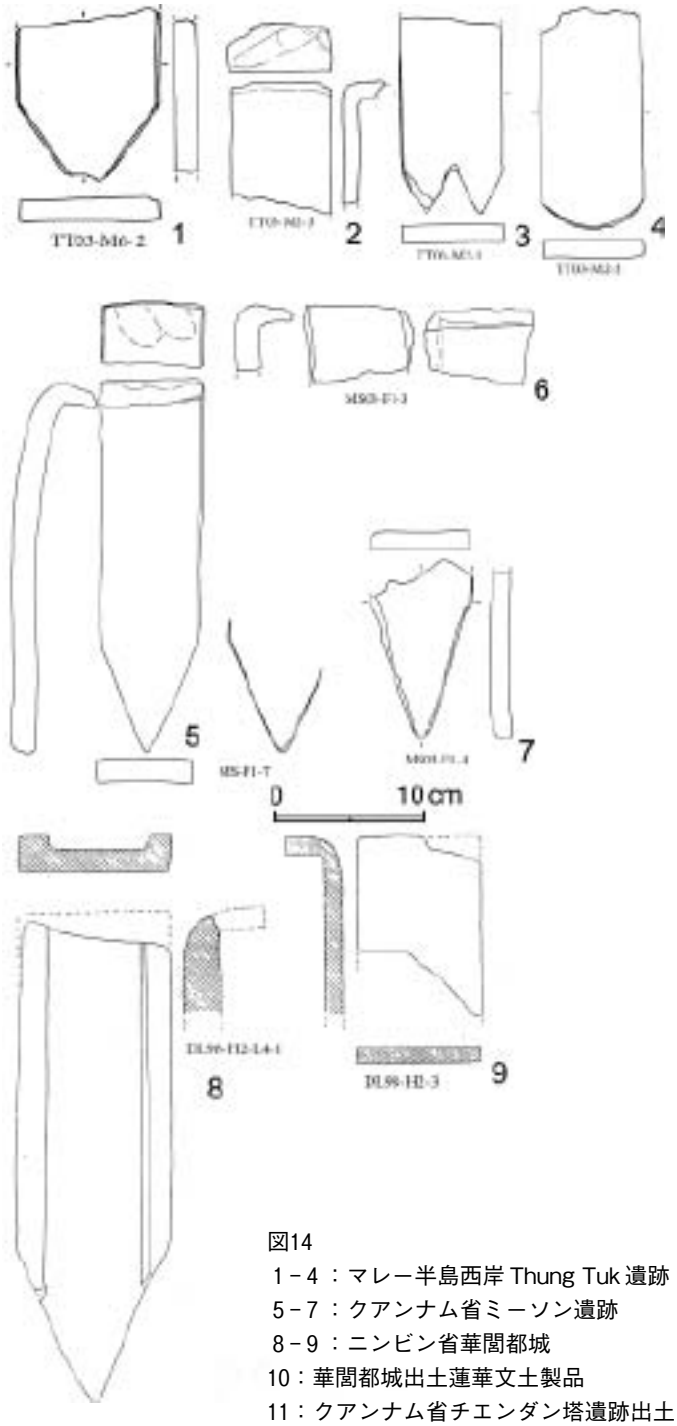
ている。先述のティウズオン社に南接するドンソン遺跡では９-10世紀までの居住が確認されており、マー川右岸の当地域が９-10世紀までの一中心であったことを暗示しているので、楊廷芸自身も、もともとは中国支配側とも何らかの関係を持ち、タインホアの中心部に勢力をもった土豪的な存在であったのであろう。

丁部領の場合、キン族とは言語学的に兄弟関係にあるムオン族側に始祖伝承[58]を持ち、ニンビン省のGia Viễn（ザーヴィエン）県Gia Phương（ザーフオン）社の出身とされている。生地は華閭より山地側に10km近く入った所である。黎恒はタインホア省のChu（チュー）川中流域、Thọ Xuân（トスアン）県Xuân Lập（スアンラップ）社を故郷にしている。

５．２．チャンパからの建築文化導入

丁・前黎朝の都となった華閭都城は、968年以降に造営されたと考えられ、それまでの唐代安南都護府の建築文化のみでなく、新しい建築文化が確認される。唐末五代のものに類似する花紋磚等も出ており、引き続き中国からの文化受容もあったと見られるが、平形尖状瓦や造形を附した熨斗瓦など、中国起源

58）宇野公一郎 1999年“ムオン・ドンの系譜 ── ベトナム北部のムオン族の領主家の家譜の分析 ──”『東京女子大学紀要論集』49-２：137-198.



10

図14
１－４：マレー半島西岸 Thung Tuk 遺跡
５－７：クアンナム省ミーソン遺跡
８－９：ニンビン省華閭都城
10：華閭都城出土蓮華文土製品
11：クアンナム省チエンダン塔遺跡出土

11

の建築文化とみることはできないものもある。平形尖状瓦（図14-１～９）は、８-９世紀頃に、チャンパの建築文化にマレー半島経由でインドから取り入れられた瓦で、それが北部ベトナムでも採用されたものと考えられる[59]。チャンパのクアンナム省のMỹ Sơn（ミーソン）遺跡やĐồng Dương（ドンズオン）遺跡に古い時期のものが確認される。また、華閭出土の蓮花を象った土製品（図14-10）[60]は、クアンナム省Tam Kỳ（タムキー）市のChiên Đàn（チエンダン）塔遺跡の石製品に類品[61]が見られる（図14-11）。動物造形や菩提樹葉形の装飾を載せた装飾熨斗瓦の形式やモチーフなども、同時期の唐代あるいは後続の中国文化に見られないもので、類品の同定は困難であるものの、チャンパからの文化導入の結果と考えた方が理解しやすい。もちろん従来の安南都護府時代の建築文化を継承する蓮華文の軒丸や丸瓦や平瓦は存在するものの、唐草文などを施した軒平瓦が存在しないことにも留意したい。つまり、華閭都城はベトナム建築史においては、それ以前の建築様式とかなり異なり、１つの大きな画期となる。

６．李・陳朝期

６．１．昇龍遷都

現ハノイ市中心部におかれた交州総管府、安南都護府は北方中国の支配拠点として機能したが、1009年に成立した李朝は、華閭から昇龍（タンロン）（現ハノイ市中心部）に再び遷都し、以後、陳朝（1225-1400年）、黎朝（1427-1789年）の都として18世紀までのベトナムの中心となる。西山朝・阮朝の都フエの歴史を経て、フランス・インドシナ総督府、さらには現ベトナム社会主義人民共和国の都がハノイに置かれている事実を鑑みれば、ハノイが地政学的に北方中国からの防衛・対抗拠点的存在として重要視されてきたことは明らかであろう。つまり、ここを失えば中国に呑み込まれるという危機感の裏返しである。

６．２．瓦などの建築文化の交流

都、昇竜において、現在確認されている李陳朝期の建築遺跡は、地上構築部の建築が、どのような建築であったかを示す具体的根拠は数少ない。ただし、建築に使われる部材、つまり瓦や塼などは、華閭都城の系譜を引いたものである。特に前出の平形尖状瓦（図15）は、より幅広のものに変化していく。棟木の中央に葺いたと想像される、菩提樹葉形装飾を施した熨斗瓦（図16）も大きな変化を遂げている。また、菩提樹葉形の装飾を先端につけた軒丸瓦（図16）や熨斗瓦など独特の瓦様式も出現する。一方チャンパ建築の瓦にも類似する瓦（図16）が存在し、この種の建築部材の変遷が不明な今、伝播の方向性を議論することはできないが、李陳朝とチャンパの間に、建築文化の明らかな交流を認めることができよう。

塼も興味深い存在である。タンロンではチャンパ文字が焼成前に刻まれた塼[62]も確認されている。ま

59）Nishimura Masanari 2010 The Roof tiles in the later period of the Champa: a consideration for its origin and diffusion, *Journal of the Cultural Interaction Studies in East Asia* No.3, 64-89.

60）Đặng Công Nga *Kinh đô Hoa Lư*. NXB Khoa học xã hội.

61）チエンダン遺跡の展示資料.

62）Tống Trung Tín ed. 2006 *Hoàng thành Thăng Long*. NXB Văn hóa thông tin, Hà Nội.

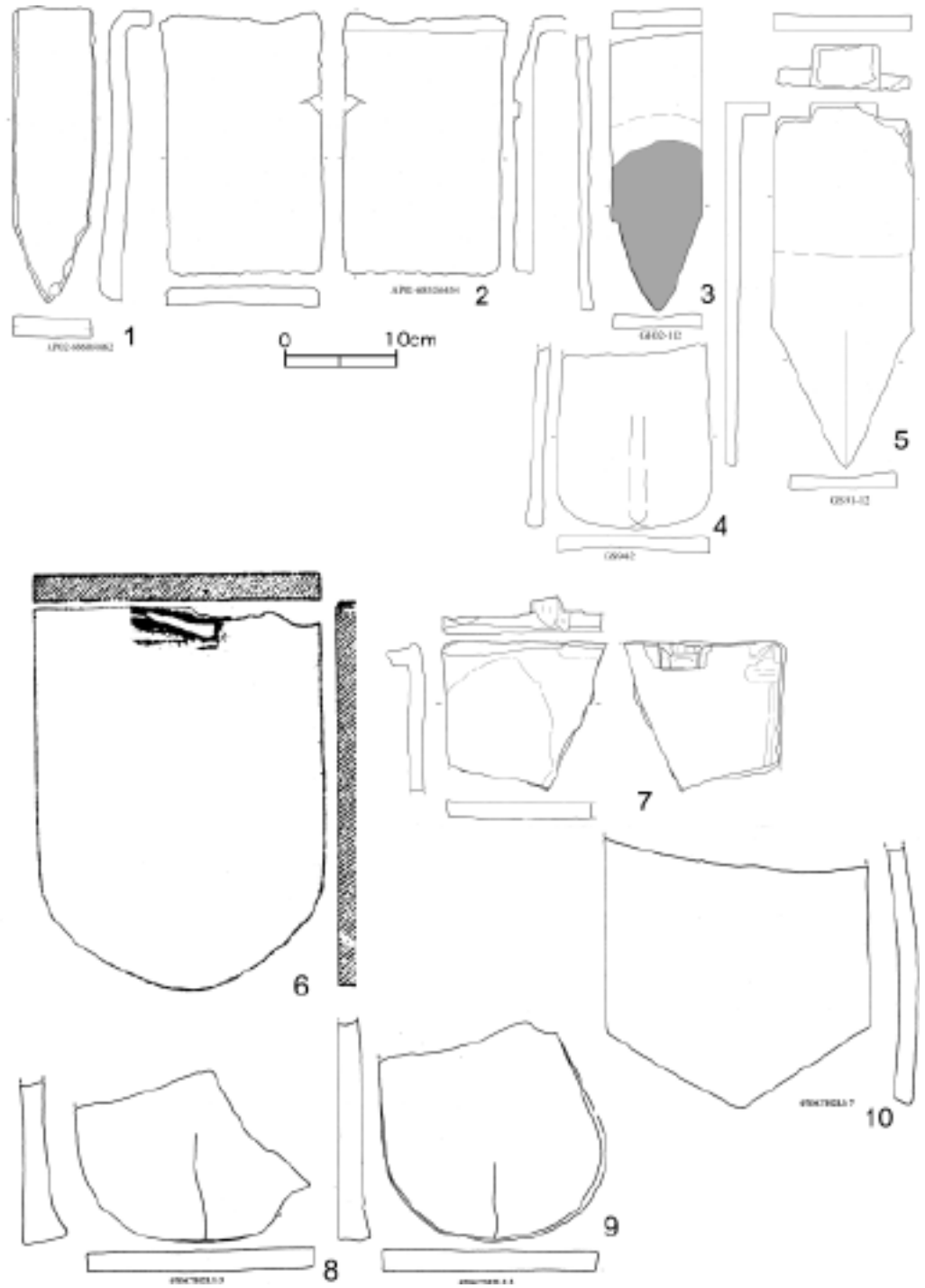


図15
1－2：クアンナム省アンフー遺跡
3－5：ビンディン省ゴーサイン遺跡
6：ハノイ・タンロン遺跡
7：ハノイ・キムラン遺跡
8－10：バックザン・デンカオトゥー遺跡

図16　左：タンロン出土の装飾付き軒丸瓦　中：タンロン出土の装飾熨斗瓦
右：中部ベトナム・ビンディン省ゴーサイン遺跡出土の類似品

た、前後時期との差異を考えるなら、華閭から昇龍の陳朝期までは灰色塼がほぼ存在が皆無で、赤色塼が殆どを占めることである。前出の安南都護府時代や後続の胡朝・黎朝期には、還元炎焼成を行わないと生産できない灰色塼が存在するのとは対称的である。塼自体の質において、灰色塼は赤色塼より硬質であるものの、生産時の歩留まりが良くないという欠点を抱える。しかし、昇龍都城の場合、皇帝が起居する国の中心部において、質を優先するなら灰色塼を使うだけの余力があったことは、高級な施釉陶磁器が大量に生産されている状況を鑑みれば、容易に察しがつく。むしろ、この現象は当時の塼に対する嗜好差であったと考えた方が納得しやすい。当然、同時期のチャンパ建築も同様に紅色塼であり、前述のチャンパ文字刻字塼例を考え合わせると、チャム人の職人が塼生産に携わっていた可能性が高いと推察する。

さらに近年、在地土豪の居館址である可能性が高いデン・カオトゥー（Đền Cao Từ：バックザン省Lực Ngân（ルックガン）県Phượng Sơn（フォンソン））の調査[63]では、瓦当面が丸瓦の長軸に対して直交せずに斜行するという非常に珍しい蓮華文軒丸瓦当（図17）が出土している。同類はベトナムではまだ確認されていないが、先年カンボジアのプノンペン国立博物館の展示に瓦当面が斜行する軒丸瓦を確認した。この瓦はクメール陶器と同材質であるから、クメール陶器の年代範囲（10-14世紀頃）に納まることになる。当事例をすぐに、大越とクメールの関係に結びつけようとは思わないが、乂安（現ゲアン省中南部とハティン省）における12世紀の活発な真臘の侵攻や、中国（宋）への朝貢より回数の多い真臘の大越（前黎朝と李朝）への朝貢は、北部ベトナム南域での南海交易をめぐる動きを反映していると理解されている[64]。また、そうした状況から驩州あるいは乂安での真臘の政治的影響力も推察されている[65]。文化面においてもクメールか

63）Trịnh Hoàng Hiệp 2009 *Báo cáo kết quả khai quật khảo cổ học địa điểm Đền Câu Từ 1 và Đền Câu Từ 2, thôn Cầu Từ, xã Phượng Sơn, Huyện Lục Ngận, tỉnh Bắc Giang*. TLVKCH.

64）桃木至朗 2011年，『中世大越国家の成立と変容』：128-156頁.

65）桃木至朗 2011年，前前掲書：237頁.

図17　デン・カオトゥー遺跡出土の斜交軒丸瓦

らの影響があった可能性も想定しながら研究すべきだろう。

以上より、タンロン遺跡などは、中国との比較や関連との研究必要性を説く向きも多いが、李陳朝期の遺跡はチャンパなど当時南接していた周辺域との比較研究も急務である。建設方法や建築材にこれだけのチャンパとの類似が見られるということは、単に建築のみならず、それらを使った建築群や都城にも文化的影響が及んでいると大胆に推察する。

６．３．昇龍郊外のチャム系文化や集落

前黎朝時代から李・陳朝期にかけて、大越はチャンパとの抗争を繰り返し、抗争に勝利したときにはチャム人を大量に連行している場合がある[66]。彼らが定住した集落は、現在でも北部の平野部に残っており、伝説等を言い伝えている。例えば、昇龍城京域に東接する駅望所や京域西北端に近い西湖西岸の観羅所は、共に黎朝以降の屯田所[67] になっているが、李陳朝期にチャム系住民が移住してきた伝承が残されている[68]。また、やや北西の紅河右岸にはPhú Gia（漢字名：富家）という集落は、李聖宗時のチャンパ遠征の捕虜を住まわせた集落で、旧名が婆伽村とされている[69]。

北部の寺院遺跡を中心に、チャンパの彫刻類に類似したキンナラ（インド神話の楽神：図18）などの石像彫刻類がよく確認されている。また、近年確認されたヴィンフック省所蔵の彫刻像やハノイ北郊Đông Anh県Võng La社のVõng La寺でのチャム系彫刻像（シヴァ神像など）などが、非常にチャム的な彫刻として認識されている[70]。Võng La社は、先述のPhú Giaとは、紅河を挟んで対岸近くに位置している。

また、バックニン省Gia Bình県Đông Cứu社にある、ベトナム史上最初の科挙合格者（1075年）とさ

66）Maspero, G. 1928 *Le royaume de Champa*. Paris and Bruxelles, G. van Oest.

67）八尾隆雄 2010年『黎初ヴェトナムの政治と社会』広島大学出版会.

68）八尾隆雄・西野範子氏ら調査資料.

69）桃木至朗 2011年 前掲書：178頁.

70）Nguyễn Tiến Đông 2008 “Những yếu tố văn hoá Cham-pa ở Thăng Long và vùng phụ cận.” Bài phát biểu hội thảo về nghiên cứu Thăng Long.

図18　左：バックニン省・仏跡寺の石製キンナリ像
右：バックニン省・黎文盛の墓近くから出土した石製の龍像

れる黎文盛（レー・ヴァン・ティン）の墓に近接するBảo Tháp（バオタップ）寺では、近くから出土した龍と思われる石製動物像（図18）が保管されている[71]。美術様式的に見て李朝のものと見て間違いなく、その写実的表現も非常にユニークである。龍を中心とする石像彫刻類はタンロンでも出土しており[72]、木造建築のための礎石とともに、砂岩等で製作されており、後代のものと石材が異なる。しかも、同時期のチャンパでも同様の石材を用いており、何らかの繋がりが想像される。

6．4．李朝ベトナム陶磁器のチャンパ器物との近接性

李朝陶磁は、ベトナムが独立して後、最初に生産された高火度焼成の高級施釉陶磁器である。現在までのところ、昇龍でしかその生産を示す物的証拠は確認されていない。その李朝陶磁のなかに、白釉磁や白釉褐彩磁器などの高品質品には、蓮弁文様などを立体的に鋭利に表現した盤、高坏（図19）などがみられる[73]。この鋭利なつくりは、金属器の模倣を起源とする形象表現と考えられる。そして、チャンパの地で発見されているわずかばかりの金属製容器（銀器など：図19）[74] に、類似した鋭利な蓮弁装飾が施されている。器形的にも、同時期の宋代陶磁などには見られないもので、チャンパの金属器などをもとにベトナムが創造した可能性が高い。

6．5．陶磁器製作技術の近接性

チャンパの都、ビジャヤ（Vijaya）が位置したビンディン省には、Gò Sành（ゴーサイン）遺跡、Gò Cây May（ゴーカイメイ）遺跡な

71）西村 2011年 前掲書.

72）Tống T. T. & Bùi M. T. 2010 *Hoàng thành Thăng Long*. NXB Khoa học xã hội, Hà Nội.

73）ホーチミン市ベトナム歴史博物館のコレクション.

74）Bảo tàng lịch sử Việt Nam Thành phố Hồ Chí Minh 1994 *Sưu tập hiện vật Champa tại Bảo tàng lịch sử Việt Nam Thành phố Hồ Chí Minh.*

図19　左：ベトナム鉄絵陶器（11-12世紀）　右：チャンパの銀器

どの、高火度焼成による施釉陶磁器生産遺跡が確認されている[75]。生産された器種のうち基本器種である碗皿は、14世紀後半から15世紀前半のものと考えられ[76]、同時期の北部ベトナムのいわゆる“ベトナム陶磁”と形態的にも極めて類似している（図20）。そして、碗皿類を多量に重ねて焼成するための碗内面中央での輪状釉剥ぎ法や５足の支焼具（トチン）も、同時期の北部のそれと極めて類似する。重ねた製品は外鞘に入れて焼成をしているが、その外鞘の形態も類似している。つまり、陶磁器の基本形態や焼成技術においては、北部ベトナムのそれと非常に強い相関関係を持っていることがわかる[77]。また、非常に伝承性の強い、陶磁器器形成形時の轆轤回転方向が、ビンディン諸窯製品とベトナム陶磁は同方向（右回転）で、中国とは異なる（左回転）という事実も両者の深い関係を強く暗示する[78]。

チャンパの考古学は、まだ北部ベトナムほど発掘調査が進展していないため、言明はできないが、このビンディン諸窯以前に高火度焼成の施釉陶磁器生産がチャンパで行われている可能性は極めて低い。つまり、相当する陶磁器が出土していないのである。従って、このビンディン諸窯の生産技術は、北部ベトナム等を中心に外からもたらされ、突如開始されたものであると考えるのが妥当である。

75）Aoyagi, Y. & Hasebe, G. 2002 *Champa ceramics : production and trade.* The study group of the Go Sanh kiln sites in central Vietnam.

76）一部の研究者に、ビンディン諸窯の製品が15世紀末以降、一部は17世紀まで継続しているという考えがあるが、陶磁器の型式学的変遷や各沈船資料からのデータは、そのような結論を許すものは全く存在しない。詳細は論を改める必要であるが、15世紀のどこかの時点（恐らく1472年時点以前）で、ビンディン諸窯は生産を終えているというのが、筆者の考えである。

77）Gò Sành（ゴーサイン）遺跡では、外鞘を用いた窯壁などが確認されており、北部の窯址で同様な例がないか追求する必要もある。

78）津田武徳 1997年“東南アジア陶磁にみる輔騒の回転方向：ヴェトナム・チャンパ陶の特異性と技術の系譜“『東南アジア考古学』17号：185-196.

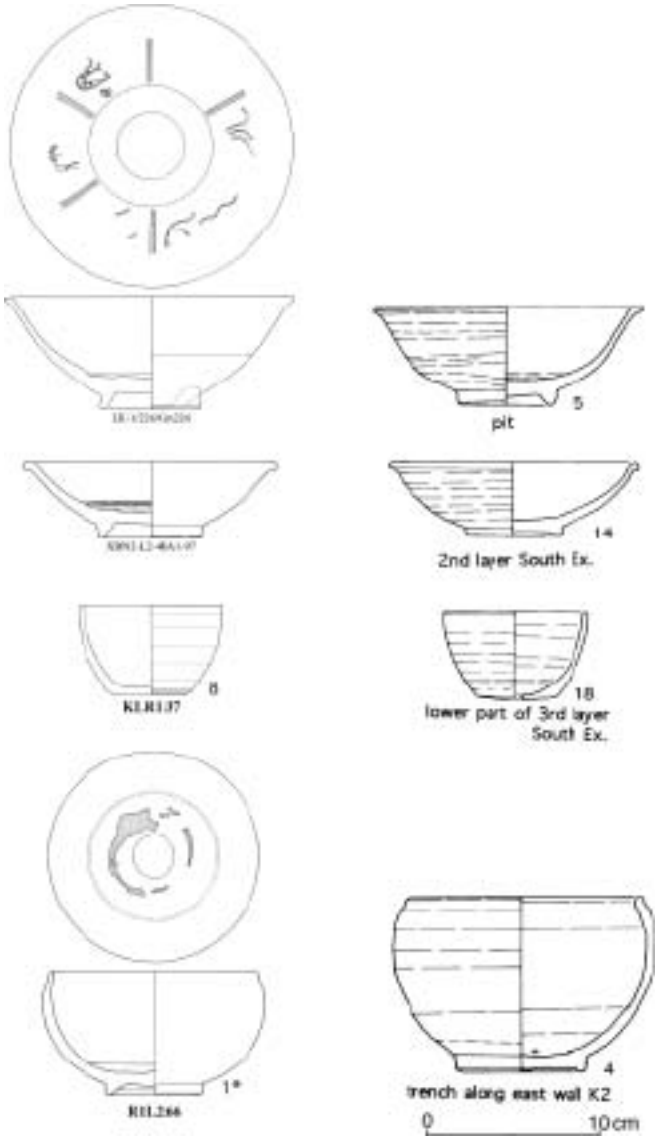


図20
左列：14世紀後半から15世紀前半のベトナム陶磁
右列：ビンディン省ゴーサイン窯製品

6．6．ベトナム陶磁の輸出

14世紀半ばからベトナム陶磁は東南アジアや日本へ、商品として輸出されている。その盛期は15世紀後半であるが、14-15世紀のベトナム陶磁の貿易を誰が行っていたかは大きな問題である。ビンディン省のドーバン城、Duong Long（ズオンロン）塔遺跡などの数少ない発掘やサーベイ調査では、14世紀後半から15世紀のベトナム陶磁が出土している。また、ジャワのマジャパイト王国のトローラン遺跡などでは、ベトナム陶

磁器の青花や鉄絵の陶磁器製タイルが出土している。このタイルは、長らくベトナム国内では未発見であったが、近年昇龍都城内[79]と外港遺跡である雲屯（クアンニン省ハロン湾東縁部）[80]でわずかに出土している。ベトナム国内ではほぼ使われていない特殊性や僅少の出土量から判断するなら、このタイルは、マジャパイトからの特注品と考えた方がよい。また、都であったトローラン遺跡[81]はタイルも含めてベトナム陶磁の出土比率が高いことが知られている。昇龍とマジャパイト間に陶磁器の特注や陶磁交易を成立せしめる条件があったと判断される。興味深いことは、このマジャパイト王国には、15世紀になるが、チャンパの王女の墓（1448年造営とされる）が残され、彼女はマジャパイトのイスラム化に重要な役割を果たしたとされている。同じマレー語圏や宗教的バックグラウンドをもつものとして、こうしたチャンパとマジャパイト間の通交関係が、多少遡っても全く不思議ではない。そして、14世紀末から15世紀半ば頃までのビンディン諸窯生産のチャンパ陶磁と北部ベトナム生産のベトナム陶磁が、一緒に商品として運ばれていることは、フィリピン・パンダナン沖やタイ・タイ湾の沈船資料で確認されている。

すでに指摘されているように、チャンパあるいはチャンパの商人がこのベトナム陶磁の中継交易に携わった可能性は十分あろう。ただし、近年明らかとなったベトナム陶磁を満載したホイアン沖沈船[82]を、筆者らの編年観では15世紀を前・中・後の３期区分し、後期に位置づけた[83]。しかし、それが1470～1471年の黎聖宗によるチャンパの Vijaya への侵攻以前か後かは、にわかに明言できない。しかし、船体構造は中国船的であるが、船体の木材自体はタイなどに生える木材で、沈船から出土した人骨も現タイ人に近いという指摘があり、タイで中国商人が船を建造させて、タイ人を含む船員により運行されていた可能性が出ている。つまり、他国の船がベトナム（大越）陶磁を運んでいる実例となる。ビンディン（チャンパ）陶磁が、明らかにベトナム陶磁の模倣を１つの起源とし、14世紀後半から15世紀前半位の活発なタイ・ベトナムの陶磁器輸出ブームに乗って輸出されていること、さらに16世紀初頭のトメ＝ピレスによる“北・中部ベトナム人が、遠洋航海を苦手とし、近隣の地（チャンパや中国）へしか航海しない”といった記述[84]などを考えあわせるなら、大越（ベトナム）と東南アジア各地域の陶磁器貿易に、チャンパが仲介していた可能性も十分想定すべきであろう。

７．15世紀：ベトナム史の分水嶺

タインホア省 Vĩnh Lộc（ヴィンロック）県の胡朝城[85]は、陳朝外戚の胡季釐（ホー・クイ・リー）が 1398年に造営開始した都城である。こ

79）Bùi Minh Trí 氏私信.

80）阿部百合子 2003年“ベトナム・大越国の陶磁貿易”『ベトナム・ホイアンの学際的研究 ── ホイアン国際シンポジウムの記録 ── ：昭和女子大学国際文化研究所紀要』vol.9：211-240.

81）坂井隆 2009年“インドネシア、トロウラン遺跡とベトナムタイル”『金沢大学考古学紀要』30：28-41.

82）Butterfields 2000 *Treasures from the Hoi An hoard.* 2 vols. Butterfields.

83）西村昌也・西野範子 2005年「ヴェトナム施釉陶器の技術・形態的視点からの分類と編年 ── 10世紀から20世紀の碗皿資料を中心として」『上智アジア学』第23号：81-122.

84）トメ・ピレス 1966年 東方諸国記、生田滋他訳・注、東京、岩波書店.

85）菊池誠一編 2005年『ベトナム胡朝城の研究Ⅰ-15世紀王城跡の史跡整備にともなう考古学的研究』昭和女子大学菊池誠一研究室. 西村 2011年 前掲書 コラム11参照.

図21　タインホア省ヴィンロック県胡朝城の位置と皇城プラン

この土木・建築技術は、陳朝と黎朝間の文化的ギャップの存在を見事に教えてくれる。堅牢な切石を丁寧に積み上げた城壁などの残存建築は、同時期の陶磁器生産の技術革新[86]と共に、胡朝期のもっていた技術力の高さを示すものである。国号を中国五帝の一人、舜（虞氏）になぞらえ大虞と称し、『周礼』考工記に乗っ取ったようなプランの都城中心部（図21）の造営は、胡季釐が模範としようとしたものが、明らかに過去の中国であったと推定させる好例である。出土する建築部材である瓦なども、それまでの陳朝のスタイルのものだけでなく、滴水瓦など中国のものも採り入れている。

そして、1402年と 1403年、二代皇帝胡漢蒼が遂に、南北の大きな堺である海雲峠（ハイヴァン）を超えて侵攻し、最終的にはビンディンまで侵攻に成功する。

属明期に続く後黎朝も、基本的には都城の建築技術や構造などにおいて、胡朝のものを受け継いだものが多いと思われる。黎朝に関しては15世紀後半以降朱子学革命とも呼ぶべき、中国化が推し進められたことが論じられている[87]。そうした状況下、黎聖宗による1470-1471年のチャンパ親征が行われ、ビンディンの闇槃城か陥落し、ついにチャンパは中部ベトナムにおける優位な立場から転がり落ちていくことになる。

8．まとめ

歴史の流れを俯瞰すると、ベトナムの形成において北部南域、中部が果たした役割が明確に理解でき

86）西村昌也・西野範子 2005年 前掲論文、81-122頁.

87）八尾隆生 2010年『15世紀黎朝政治史研究』広島大学出版会.

ると思う。タインホアを中心とする北部南域は、紅河平野の南半からゲアン省北部までくらいを範囲とするドンソン文化の核領域であったことが銅鼓の分布から明らかである。従って、同時期の紅河平野以北には文化的に異なる集団が存在し、彼らがハノイ北郊のコーロア城造営を行ったか、あるいは造営者に協力したというのが筆者の仮説的理解である。つまり、この頃北部ベトナム平野部における文化的・民族的均質化はまだ生じていないというのが筆者の考えである。

この後、タインホアを中心とするドンソン文化の担い手は、北部サーフィン文化の領域の集団と銅鼓を中心とする交易を積極的に行う。もしかすると、それは迫り来る北からの文化的・政治的圧力への一種の反作用なのかもしれない。しかし、ドンソン文化の担い手が東南アジア各地に移民のように移住したようなことはありえない。あくまでもサーフィン文化集団を仲介者とした交流であり、自らが積極的に海洋や他地域へ乗り出すようなものではなかったと推察する。

そして、漢の支配が九真・日南などの北部南域まで実質的に及ぶようになった１世紀半ば以降、漢側の支配者を頂点に在地の一部エリートが含まれる形で、文化的政治的統合が、現北部ベトナム平野部相当域で進み始める。遺跡の継続性などに依拠するなら、中でもタインホア平野域は比較的素直に漢文化を受容した人が多くいたように思われる。その一方で、従来からのドンソン文化伝統は、恐らく山岳部を中心にある程度の期間継承され、一部は龍編政権などにも取り込まれ、やがては広西などの北方へ伝播する。つまり在地集団の二極分化があった可能性が高い。このドンソン文化伝統（あるいは銅鼓製作伝統）が山岳域を起源とし、最終的に北方へ伝わる様態は、平野部での漢文化の広まりに対する一種の反作用であり、文化交渉学的に非常に興味深い現象である。

そして、二極分化した両集団が時として手を結び、漢側支配者へ抵抗／起義することは頻繁なことであり、時にはチャンパ系集団（林邑）とも結びつくことも可能であった。こうして山岳部や中部との通交に有利な立場にあった九真や日南（現在のタインホアからハティン省あたり）地域が、漢側への反抗の重要な役割を果たしたことは間違いない。

北部ベトナムへ４世紀以降、チャンパは猛侵攻を行うが、これは決してチャンパと北部ベトナム側との民族的・文化的差異や対立に根ざすものではなく、交易の利をめぐる争いである。特に、九真や日南の人々にとっては林邑側と連帯することは当たり前の感覚であったように思える。ゲアンやハティンの場合、ラオスやカンボジア方面との関係もあったこと、さらに中国商人が海南島東回りで、直接来航できるところであったことなど、チャンパ以外の外国関係も選択肢に入れることができたようで、単に紅河平野の政権を中心視して思考・判断していたわけではないことが明らかである。

むしろ漢代以降、中国支配によるベトナムの中国化と中国側支配者により行われたチャンパとの抗争が、チャンパとの文化的違いや政治的対立をベトナムの人々に根付かせ、最終的には10世紀の独立後も南進性が継承されたと考えられる。ただし、桃木氏が論じるように、李・陳朝期まではベトナムのチャンパへの認識や関係は可逆性のあるもので、互いに両者が利用できあう交流関係などが確実に存在している。また、10世紀後半から李陳朝期の文化に根付いたチャンパ系の文化は、これまで中国文化的なものがその頂点であったベトナム文化において、中国文化との異化に大いに活躍したように思える。恐らく10世紀から李陳朝期の社会を、中国をモデルにした亜流的存在として理解しようとすれば、大きな誤解を生ずるであろう。つまり、15世紀以後の文化のベクトルとは全く違っている可能性が高い。

そして15世紀の胡季釐、黎聖宗らの南征が、チャンパの地位を決定的に瓦解せしめるが、それは彼らがとった中国モデルの改革と無縁ではあるまい。もう、彼らはチャンパ側から文化摂取なども必要とせず、自らを南の中華的存在として、ひたすら領域の拡大とそれに伴う交易利益の拡大を狙っていたのであろう。そこには、紅河平野をはじめとして、平野部での可耕地拡大可能性が、ほぼ皆無となった農業上の理由からの領地拡大要求も絡んでいるようだ[88]。両者が共に、タインホア・ゲアンの出身者であることは、以下に述べるその後のベトナム史理解においても重要である。

1558年にフエに入府し、広南阮氏政権の祖となる阮潢、1597年に莫氏政権を倒して、幕府的政権を作り上げた鄭氏もタインホアを出身地としている。そして、現在のベトナムに近い支配域に国家範囲を拡大させた西山朝の阮岳・阮恵らはビンディン省出身であるが、祖先は乂安からの移住者である。そして、最終的に広南阮氏の系譜をひく阮暎のより、最後の封建王朝、阮朝が立朝されている。また、中部ベトナムには、阮潢の入府以降移住してきたタインホア・ゲアンの人々が非常に多い。これは、チャンパの存在が衰弱方向へ決定的となり、それに乗じるように北部南域のキン族が一気に移住して南進を進めた結果であろう。そして、彼らの一部は、その後さらなる海外（タイ[89]・ラオスなど）飛躍を行っている。

ドンソン時代から18世紀まで、常にベトナムの“南”は、その北接する人たちと密接な関係を持ちながら、徐々に南下していったことになり、並行して、北部北域、つまり安南都護府-昇龍という中原的存在が形成され、やがては国土の長大化に応じて、フエ域に中心を移すという事態に至ったことになる。その“南”と北の両側で振り子玉のように活躍したのが、間に位置した北部南域（タインホアからハティン）の人であったことになる。

“タイン・ゲの人（Dân Thanh Nghệ）”という言葉に象徴されるように、タインホア・ゲアンはキン族社会の中でも、特異な位置づけがなされている。この言葉はハノイを中心にしてキン族社会を見た場合の周縁的存在を意味し、さらに畏敬と蔑視の意味両方が含まれているようだ。このような言葉が生まれるほど、タインホア・ゲアンの人々はベトナム社会において立身出世に邁進している人々が多く、その強力な地縁にもとづく連帯能力や進出能力は、誰しもが認めるところであろう。しかし、それはつい最近に形成・獲得されたものではなく、北部南域が中国支配者側やチャンパとの複雑な関係史を経る中で形成・獲得されたものである。タイン・ゲを理解せずして、ベトナムは理解できないというのが、個人的結論である。

88）西村 2011年 前掲書.

89）例えば、西山党混乱期に清華・乂安の人がバンコックに移民している。西村昌也 2009年“バンコック・ヴェトナム系仏教寺院におけるヴェトナム系ならびにタイ系梵鐘について“『東アジア文化交渉研究』２号：165-175頁.

表1　北属・交趾・チャンパ関係史

時期	起義・反乱主体者	起義・反乱の地域					チャンパとの関係			主な史料源
		紅河平原域	タインホア地域	ゲアン以南	ベトナム他地域	中国側	チャンパへ遠征	チャンパの侵攻	チャンパなど中部からの朝貢	
40-43年	徵姉妹	交趾	九真	日南		合浦				後漢書・南蛮伝
84年									日南徼外	後漢書・南蛮伝
100年				日南・象林						後漢書・和帝紀
107年									九真徼外夜郎	後漢書・南蛮伝
122年									日南徼外蛮・九真徼外夜郎	後漢書・南蛮伝
131年									日南徼外葉調王	後漢書・南蛮伝
136年				象林						後漢書・順帝紀
137年		交趾	九真	日南						後漢書・順帝紀　後漢書・南蛮伝
144年				日南						後漢書・冲帝紀　後漢書・南蛮伝
157年	朱達		九真							後漢書・桓帝紀
160年			九真	日南						後漢書・桓帝紀
178-181年		交趾	九真	日南		合浦				後漢書・霊帝紀　後漢書・朱俊伝
184年		交趾								後漢書・賈琮伝
192年	区連			日南						晉書・林邑伝　　水経注
226-年	士徽									三国志・士燮伝　三国志・呂岱伝
239年	廖式	交州				蒼梧・鬱林				三国志・孫権伝
248年	趙嫗	交趾	九真					日南		三国志・陸凱伝　南越志　交州紀 水経注
262年	呂興	交趾								三国志・孫休伝
268年									林邑・扶南	晉書・武帝紀
268-271年	毛炅・董元	交趾	九真	日南		蜀・郁林				三国志・孫皓伝　晉書・武帝紀　晉書・陶璜伝
271年以後280年以前	李祚		九真							晉書・陶璜伝
280年									林邑・大秦国	晉書・武帝紀
280年より後	趙祉		九真							晉書・吾彦伝
320年頃	梁碩	?								晉書・陶侃伝　晉書・王諒伝
347年								日南		晉書・林邑伝
348-349年								九真		晉書・林邑伝
351年							日南			水経注

時期	起義・反乱主体者	起義・反乱の地域					チャンパとの関係			主な史料源
		紅河平原域	タインホア地域	ゲアン以南	ベトナム他地域	中国側	チャンパへ遠征	チャンパの侵攻	チャンパなど中部からの朝貢	
353年							日南			晉書・穆帝紀
358-359年	杜宝	交趾								晉書・穆帝紀 晉書・溫嶠伝　水経注
372年									林邑・百済	晉書・簡文帝紀
377年									林邑	晉書・孝武帝紀
380年	李遜		九真							晉書・孝武帝紀
382年									林邑	晉書・孝武帝紀
399年								日南･九真･九徳･交趾		晉書・安帝紀　南史・林邑伝
405-418							九真・日南	日南･九真･九徳		晉書・林邑伝
411-412年	盧循	交趾	九真							宋書・杜慧度伝
413年								九真		晉書・安帝紀　水経注
414年									林邑	晉書・安帝紀
417年									林邑	晉書・安帝紀
421年									林邑	宋書・林邑伝
424年								日南・九徳		宋書・林邑伝
431年								九徳		南史・林邑伝
435年									林邑	南史・林邑伝
438年									林邑	南史・林邑伝
439年									林邑	南史・林邑伝
441年									林邑	南史・林邑伝
445-446年							日南・林邑			南史・武帝紀　水経注
455年									林邑	宋書・林邑伝
458年									林邑	宋書・林邑伝
468年	李長仁	交州？								宋書・明帝紀
472年									林邑	宋書・明帝紀
491年									林邑	南斉書・林邑伝
498年									林邑	南斉書・林邑伝
502年									林邑・干陁利	梁書・武帝紀
505年	李凱	交州？								梁書・武帝紀
510年									林邑	梁書・武帝紀

時期	起義・反乱主体者	起義・反乱の地域					チャンパとの関係			主な史料源
		紅河平原域	タインホア地域	ゲアン以南	ベトナム他地域	中国側	チャンパへ遠征	チャンパの侵攻	チャンパなど中部からの朝貢	
511年									林邑	梁書・武帝紀
512年									林邑・扶南	梁書・武帝紀
513年									林邑	梁書・武帝紀
514年									林邑・	梁書・武帝紀
526年									林邑	梁書・武帝紀
527年									林邑・師子	梁書・武帝紀
528年									林邑	南史・林邑伝
529年									林邑	南史・林邑伝
530年									林邑	梁書・武帝紀
541-548年	李賁	交州								梁書・武帝紀　陳書・高祖紀
543年								徳州		梁書・武帝紀
595年									林邑	隋書・高祖紀
602年	李仏子	交州								隋書・高祖紀　資治通鑑
604年							林邑			隋書・林邑伝
605年							林邑			隋書・煬帝紀　資治通鑑
623年									林邑	資治通鑑
624年	姜子路			日南						資治通鑑
628年									林邑	旧唐書・真臘伝
630年									林邑	資治通鑑
631年									林邑	資治通鑑
640年									林邑	旧唐書・太宗紀
653年									林邑	旧唐書・高宗紀
687年	李思慎	安南都護府								旧唐書・延祐伝　資治通鑑
722年	梅叔鸞			驩州						旧唐書・楊思勖伝
767年	崑崙闍婆	安南都護府								大越史記全書・外紀
782年	李孟秋	安南都護府		演州						資治通鑑
791年	杜英翰･馮興	安南都護府								新唐書･趙昌伝　資治通鑑　大越史記全書
793年									環	新唐書・徳宗紀
803年	王李元	?								新唐書・徳宗紀

時期	起義・反乱主体者	起義・反乱の地域					チャンパとの関係			主な史料源
		紅河平原域	タインホア地域	ゲアン以南	ベトナム他地域	中国側	チャンパへ遠征	チャンパの侵攻	チャンパなど中部からの朝貢	
809年							環			旧唐書・憲宗紀
819-820年	楊清	安南都護府		驩州						資治通鑑　旧唐書李皋伝附象古伝
824年					黄家洞			陸州		新唐書･裴守真伝附行立伝　旧唐書･敬宗紀
828年	王升				峰州					新唐書・文宗紀
843年		安南都護府								資治通鑑
858年						南詔の侵攻				資治通鑑
860年					土蛮	南詔				新唐書・南詔伝
861年								安南都護府		旧唐書・懿宗紀
862-866年						南詔				資治通鑑　旧唐書・懿宗
880年		安南子城								資治通鑑
930年	梁克貞					南漢の侵攻	南漢の侵攻			新五代史・南漢世家
931年	揚廷芸		愛州							資治通鑑
938年	呉権		愛州							資治通鑑